

郷原地才工下平遺跡

一般県道河原インター線道路改良工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2007. 3

財団法人 鳥取市文化財団

# 郷原地才工下平遺跡

一般県道河原インター線道路改良工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2007. 3

財団法人 鳥取市文化財団





郷原地才工下平遺跡 調査前遠景（西から）



郷原地才工下平遺跡 調査地全景（北東から）



卷頭図版 2



郷原地才工下平遺跡 SI-01検出状況（北東から）



郷原地才工下平遺跡 SI-01出土遺物

# 序 文

鳥取市内には数多くの原始・古代遺跡が存在しており、近年の各種開発事業の増加とともに発掘調査が必要となり、消えていく遺跡も増えております。しかしながら、埋蔵文化財は地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき市民の貴重な財産です。このような認識のもと、財団法人 鳥取市文化財団では、開発と文化財の共存をはかるべく、関係各機関の協力を得ながら埋蔵文化財発掘調査事業を進めています。

さて、今回実施した河原町郷原地才工下平遺跡の調査は、一般県道河原インター線道路改良工事に伴う発掘調査として、平成18年度に調査を行いました。この遺跡は千代川と八東川とが合流する国中平野入り口の丘陵部に展開します。平成15年度に旧河原町による試掘調査、16年度には郷原石堂口遺跡・郷原古墳群の発掘調査が行われ、古墳時代中期から後期にかけての古墳5基、土坑が見つかり、須恵器、土師器などのほかに埋葬施設から、鞘に入った鉄剣、刀子、高杯転用枕などが出土しました。また、今年度の調査では、6世紀代の竪穴住居、土坑、柱穴が見つかり、当地域の古代集落の具体相を知る上で貴重な成果を得ることができました。

これらの調査成果は、当地域のみならず古代因幡地方の歴史を探る上で大きく役立っていくものと確信いたします。ささやかな冊子ではありますが、研究者のみならず広範な市民各位による郷土の歴史究明など、関係各位の埋蔵文化財の理解に供していただければ幸いです。

おわりに、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ関係各位の方々に、心から感謝申し上げます。

平成19年 3月

財団法人 鳥取市文化財団  
理事長 山崎 祥次

## 例 言

1. 本書は、一般県道河原インター線道路改良工事の事前調査として実施した郷原地才工下平遺跡ごうばらじざいくしもひらの発掘調査報告書である。
2. 郷原地才工下平遺跡は、鳥取県の委託を受けて、財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財センターが平成18年度に実施した。
3. 発掘調査を実施した遺跡の所在地は、鳥取市河原町大字郷原字地才工下平である。
4. 発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。
5. 現地実測・写真撮影、遺構図面の浄書は、調査員、補助員を中心に発掘調査参加者の協力のもとに行い、出土遺物の整理および遺物実測・浄書は、神谷伊鈴、下多みゆき、濱橋博子を中心として行った。出土遺物観察表は神谷伊鈴、濱橋博子が作成した。本書の執筆、編集は前田均、谷口恭子が担当した。
6. 現地調査から報告書作成にいたるまで多くの方々からの指導、助言ならびにご協力をいただいた。厚く感謝いたします。

## 凡 例

1. 本書における方位、座標値は、第1・2図を除き国土座標第V系(世界測地系)による。また、高さは海拔標高である。  
本書で遺構の略号として、竪穴住居；SI、土坑；SK、ピット；Pを使用した。
2. 今回の調査によって出土した遺物は、遺跡名、遺構名、遺物台帳登録番号、取り上げ年月日を基本的に注記し、写真や図面などの記録類も同様である。  
(例；ゴウ原地才工下平 SK01 No62 2006.08.25)

# 本文目次

序文	
例言	
凡例	
第1章 発掘調査の経緯	
第1節 発掘調査にいたる経緯	1
第2節 発掘調査の経過	1
第3節 調査の組織・体制	2
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	
第1節 郷原地才工下平遺跡の位置	3
第2節 遺跡の歴史的環境	3
第3章 調査の結果	
第1節 調査地の立地と層序	6
第2節 調査の結果	
1. 竪穴住居	8
2. 土坑	17
3. その他の遺構と遺物	
ピット状遺構	21
遺構外出土遺物	22
第3節 まとめ	25
写真図版	
報告書抄録	

## 挿 図 目 次

第1図 郷原地才工下平遺跡調査地位置図…………… 2	第12図 SK-01出土遺物実測図……………18
第2図 郷原地才工下平遺跡周辺遺跡分布図………… 4	第13図 SK-02実測図……………18
第3図 郷原地才工下平遺跡調査区設定図…………… 6	第14図 SK-03実測図……………18
第4図 郷原地才工下平遺跡調査前地形図…………… 7	第15図 SK-04実測図……………19
第5図 郷原地才工下平遺跡調査地全体図 ……9・10	第16図 SK-05実測図……………19
第6図 郷原地才工下平遺跡調査地土層断面図 ……11・12	第17図 SK-06実測図……………19
第7図 SI-01実測図……………13・14	第18図 SK-07実測図……………20
第8図 SI-01出土遺物実測図(1)……………15	第19図 SK-08実測図……………20
第9図 SI-01出土遺物実測図(2)……………16	第20図 P-25実測図……………21
第10図 SI-01出土遺物実測図(3)……………17	第21図 P-25出土遺物実測図……………21
第11図 SK-01実測図……………18	第22図 遺構外出土遺物実測図……………22

## 挿 表 目 次

第1表 ビット状遺構一覧表……………23	第3表 竪穴住居一覧表……………25
第2表 出土遺物観察表……………24	第4表 土坑一覧表……………25

## 図 版 目 次

巻頭図版1 郷原地才工下平遺跡 調査前遠景 (西から)	SI-01 完掘状況(北東から)
郷原地才工下平遺跡 調査地全景 (北東から)	図版5 SI-01 SIP-2断面(南東から)
巻頭図版2 郷原地才工下平遺跡 SI-01検出状況 (北東から)	SI-01 SIP-4断面(南東から)
郷原地才工下平遺跡 SI-01出土遺物	SI-01 壺(図1)出土状況(南東から)
図版1 郷原地才工下平遺跡 調査前近景 (南西から)	SI-01 壺(図2)出土状況(北東から)
郷原地才工下平遺跡 調査前(北東から)	図版6 SK-01断面(南西から)
図版2 郷原地才工下平遺跡 調査地全景 (南西から)	SK-01完掘状況(南東から)
郷原地才工下平遺跡 調査地全景 (北東から)	SK-02検出状況(北西から)
図版3 調査区G~H杭間土層断面(北西から)	SK-03検出状況(北西から)
調査区GN2区C-C'間土層断面 (南西から)	図版7 SK-04検出状況(南西から)
調査区D~DS2杭間土層断面 (南西から)	SK-05検出状況(南西から)
図版4 SI-01 土層断面(北西から)	SK-06検出状況(北西から)
SI-01 遺物出土状況(南西から)	SK-07検出状況(南西から)
	図版8 P-25検出状況(北東から)
	CN1~DN1区ビット検出状況(東から)
	DS1~DS2杭間トレンチ土層断面(南から)
	図版9 SI-01出土遺物
	図版10 SI-01出土遺物
	SK-01出土遺物
	P-25出土遺物
	図版11 遺構外出土遺物



# 第1章 発掘調査の経緯

## 第1節 発掘調査にいたる経緯

郷原地才工下平遺跡は、鳥取市河原町郷原に所在し、千代川と八東川が合流する国中平野入り口の南丘陵中に展開する。古来より郷原周辺には古墳や遺跡が数多く分布することが知られ、昭和30年に町指定文化財である郷原1号墳、昭和58年に中世の集落遺跡である前田遺跡、昭和60年に弥生～奈良・平安時代の住居跡が見つかった郷原遺跡など古くから発掘調査が行われてきた地域である。

今回、郷原地才工下平遺跡の発掘調査の契機となった一般県道河原インター線道路改良工事業は、中国横断自動車道姫路鳥取線河原インターチェンジへのアクセス道として国道29号線と53号線を結び高速道路網を補完する幹線道路として鳥取県が整備計画した事業である。工事区域は郷原古墳群の分布する丘陵を東西に横断することから、またその他の遺跡所在の確認を行うために河原町教育委員会が平成15年に工事区域の試掘調査を行っている。調査の結果、古墳2基と遺跡3箇所が新たに確認され、関係機関と協議の結果、記録保存で対応することとなった。なお、平成16年6～10月に河原町教育委員会が郷原11号墳の調査を実施し、報告書が刊行されている。平成16年11月、河原町を含め周辺9市町村が合併して新鳥取市となったことから、鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財センターが残りの調査対象となる遺跡について調査を行うこととなり、平成17年に郷原石堂口遺跡、郷原古墳群の調査を実施し、報告書を刊行している。

## 第2節 発掘調査の経過

郷原地才工下平遺跡の発掘調査は、鳥取県の委託を受け、財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財センターが平成18年度に調査を行った。

平成18年度は、5月から発掘資材の整備や搬入などの調査準備に取りかかり、本格的な調査を6月初旬から開始した。立ち木の伐開整理の後、業者委託により、工事路線の中心線No14+20杭を基準杭(B)として、調査地の長軸および地形傾斜に直交するA～H軸を設け、10m毎に基準点測量を兼ねた方眼杭(A～H杭、AS1杭、BS1杭ほか)を設定した。調査区はこの10m四方のグリッドを、A～Hから南をAS1区、BS1区…、A～Hから北をAN1区、BS1区…と呼称した。)その後、調査前の現況の地形測量を行い、細かな地形補足・修正については手取りで対応した。

また、調査地は果樹栽培により段状の平坦地に改変され、特に中央部南半が大きく掘削され、クレーター状の丸い落ち込みが随所に観察された。河原町が調査した試掘トレンチ(Tr4-1～4-5)の精査および新規に設定したトレンチTr1～3、の掘り下げを行い、遺構の範囲確認をはじめ地層の堆積状況を観察した。その結果、対象外となるTr2周辺を残土置き場とした。表土除去作業は斜面低位にあたる西側のA区からとりかかり、東側へと順次進めた。

調査の結果、調査区南下半のA～DS1・S2区では、果樹栽培に伴う円形の肥料穴が多数検出され、CN1区で方形の竪穴住居SI-01、その周辺を中心として土坑8基、ピット72基を検出した。SI-01からは上層を始め多くの土器が検出され、竈、甗、甕片、磨石などが出土している。また、SI-01は炭化材や炭化物の出土から元々は焼失住居であった可能性が大きい。その他にSK-01からは須恵器杯蓋と製塩土器が出土している。

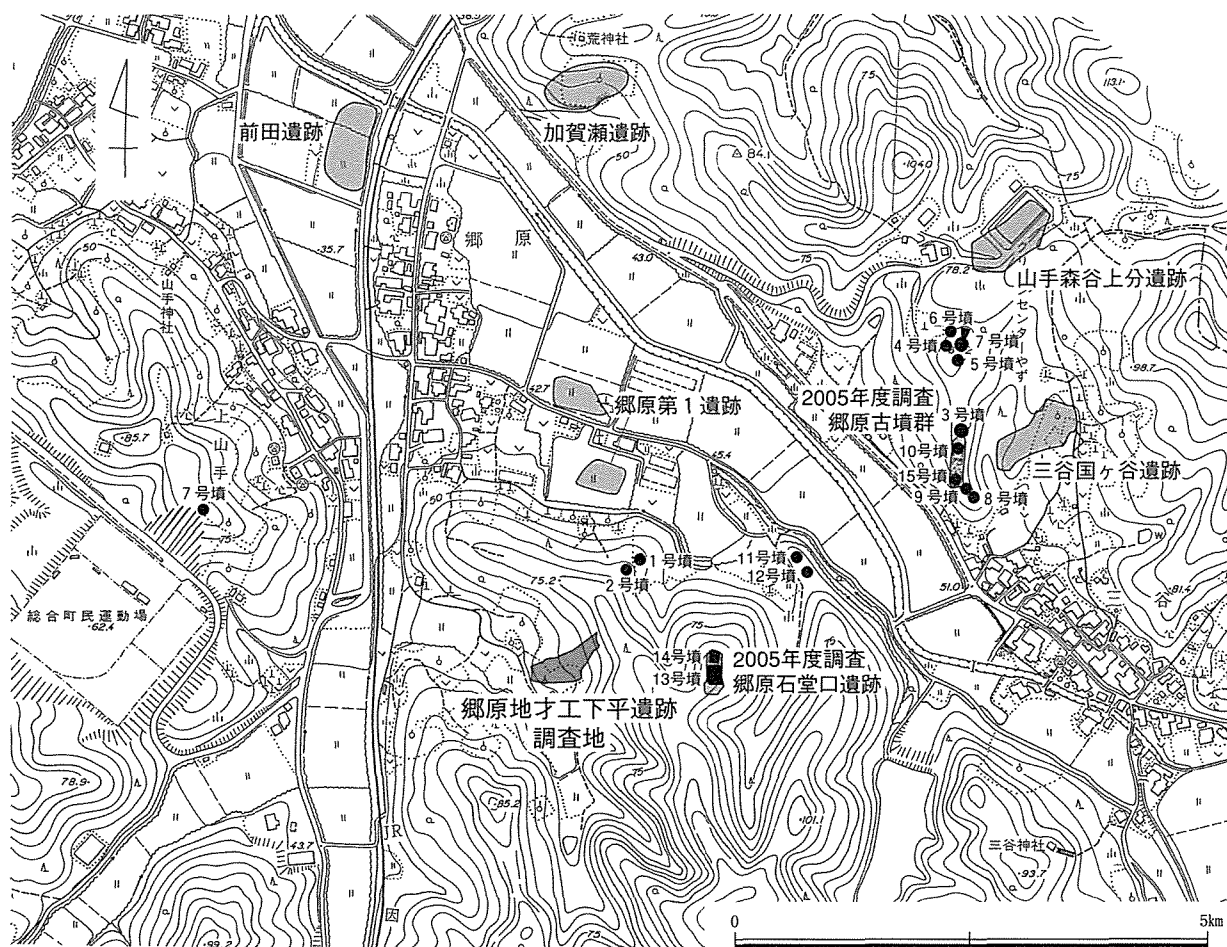
調査を通じて遺構、遺物については適宜写真撮影や実測をして記録をとり、取り上げを適宜行った。業務委託による調査区の遺存実測を実施、最終的にD～DS2杭間トレンチを断ち割って断面調査を行った。こうして撤収作業を行い11月15日に現地調査を終了した。

出土した遺物、写真や図面などの記録類の整理は現地調査と並行して進め、出土遺物については水洗い後注記、接合・復元作業を行った。順次報告書作成作業にとりかかり、平成19年3月末に終了した。

### 第3節 調査の組織・体制

発掘調査の組織、体制は以下のとおりである。

調査主体	財団法人	鳥取市文化財団
理事長		山崎 祥次
兼常務理事		
副理事長		三田三香子 住田 高市
調査指導	鳥取市教育委員会	事務局文化財課
事務局	財団法人	鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財センター
所長		前田 均
副所長		山田 真宏
調査事務		秋田 澄世
調査担当	財団法人	鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財センター
調査員		前田 均 谷口 恭子 神谷 伊鈴
調査補助員		下多みゆき 濱橋 博子



第1図 郷原地才工下平遺跡調査地位置図(S=1:8,000)

## 第2章 遺跡の位置と歴史的環境

### 第1節 郷原地才工下平遺跡の位置

郷原地才工下平遺跡は、鳥取市河原町(合併前の旧八頭郡河原町)郷原に所在する。鳥取市は県東部に位置し、面積237.25km<sup>2</sup>、人口20.1万人を擁する県庁所在地である。平成16年11月1日に河原町を含めた周辺九市町村による広域合併を行い、北は日本海を臨み、南は岡山県と県境をはさむ。河原町は県東部のほぼ中央部に位置し、東西17.6km、南北9.3kmと東西に長く総面積83.62km<sup>2</sup>である。町の東端を千代川が南北に貫流し、交通の大動脈である国道53号線もそれに沿って岡山県へと続く。千代川の中流域および支流の八東川、曳田川、宇戸川下流域を小平野とし、西方一帯には標高200~1,000mの山地に囲まれた山間部が広がる。河原町の地質は多様で、町の西半は中生代火山岩類が広がり、東半は鳥取総群と総称する新第三紀中新世~鮮新世の地層や岩石に広く覆われており、郷原地域は鳥取層群円通寺礫岩砂岩層の礫・砂・泥互層から成り、ブナ・カエデなどの植物化石が一部で産出する。谷底平野を中心とする平坦地を水稻栽培、居住域に充て、低丘陵部は梨を中心とした果樹栽培、畑地、放牧場に利用している。

郷原地才工下平遺跡は、河原町の中央東端部に位置し、千代川と八東川、八東川と私都川が合流する国中平野入口の後背丘陵部、標高60m前後の南西斜面に展開する。遺跡から西面する狭谷の東辺をJR因美線が南下する。郷原地才工下平遺跡が立地する複雑な枝状に延びる北西方向の尾根上には、標高93mで郷原石堂口遺跡、郷原古墳群が所在し、昨年度調査が行われている。三谷川対岸の八頭町とを介する丘陵一帯や郷原集落周辺地域にも古墳や遺跡が数多く分布することが知られている。圃場整備に伴い、昭和58年に郷原遺跡、昭和60年に前田遺跡の発掘調査が行われている。

今後、中国横断自動車道姫路鳥取線および河原インター線の完成によって遺跡周辺の状況は変化していくとみられ、河原インターチェンジ付近に昨年春、河原町清流茶屋道の駅がオープンした。その東側一帯の丘陵、谷部を横断するように河原インター線の工事が橋脚建設をはじめ急ピッチで進んでいる。これら交通網の整備・開発によって今後景観は徐々に変貌していくものと思われる。

### 第2節 遺跡の歴史的環境

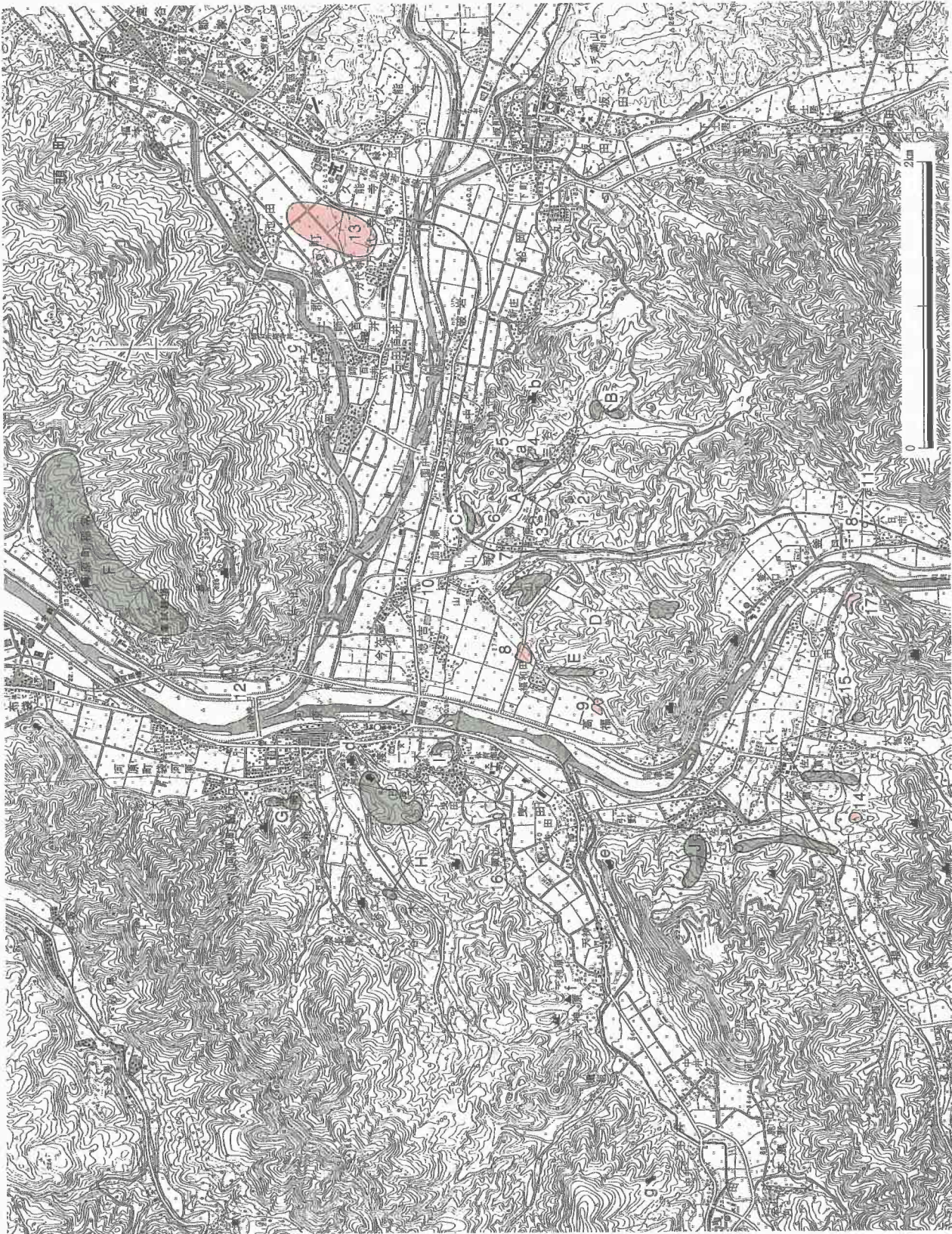
河原町内には、現在のところ、230箇所余りの遺跡が確認されている。

**【縄文時代】** 河原町で縄文時代の遺跡としては、郷原地才工下平遺跡から700m北西に位置する前田遺跡や国英駅南西に位置する下中溝遺跡でわずかに縄文土器が出土しており、隣町の用瀬町でも余井遺跡、鷹狩遺跡で縄文土器や石器が出土している程度である。八東川流域の旧郡家町万代寺遺跡では後期~晩期と考えられる落し穴53基が、西御門遺跡では後期の多くの磨消縄文土器、石器がいずれも発掘調査で見つかっている。また、中国山地山間部に位置する縄文時代の遺跡として智頭町智頭枕田遺跡が挙げられる。平成14年、早期および中期末から後期初頭の竪穴住居多数が発見され、内6棟に石囲埋甕炉が遺存するなど10万点を越す土器・石器などを含め、西日本最大級の縄文集落遺跡として注目されている。

**【弥生時代】** 河原町で弥生時代の遺跡は、今在家の上土居遺跡から中期土器数片、下中溝遺跡から後期後葉の土器、前田遺跡で同じく後期後葉期の掘立柱建物と土壙、郷原遺跡で竪穴住居3棟、山手森谷上分遺跡でも竪穴住居が検出されている。現状では千代川と八東川が合流する平野南東の丘陵裾の微高地、河岸段丘上に弥生時代の遺跡の分布の中心があり、同じく曳田川流域や佐貫周辺の段丘上でも同様な状況で集落遺跡の存在が推察されている。国中平野周辺でも、八頭町丸山遺跡で中期の竪穴住居1棟、万代寺遺跡でも竪穴住居のほか中期の土壙墓群が、久能寺狐塚遺跡でも後期の竪穴住居が調査されている。

**【古墳時代】** 古墳時代に入って、平野を望む丘陵上に古墳が築造されるようになる。千代川西岸の築





- A 郷原古墳群
- B 三谷古墳群
- C 加賀瀬古墳群
- D 山手古墳群
- E 高福古墳群
- F 稻常古墳群
- G 長瀬古墳群
- H 谷一木古墳群
- I 渡一木古墳群
- J 大平古墳群
- K 佐真古墳群

- 1 郷原地才工下平遺跡
- 2 郷原石壘口遺跡
- 3 郷原遺跡
- 4 三谷国々谷遺跡
- 5 山手森谷上分遺跡
- 6 加賀瀬遺跡
- 7 前田遺跡
- 8 高福所在遺跡
- 9 高福大將軍遺跡
- 10 上土井遺跡
- 11 釜口遺跡
- 12 片山遺跡
- 13 万代寺遺跡
- 14 佐真遺跡
- 15 佐真上台遺跡
- 16 曳田遺跡
- 17 八日市経塚
- 18 下中津遺跡

- a 郷原7号墳
- b 三谷城跡
- c 土師百井院寺跡
- d 丸山城跡
- e 八上1号墳
- f 天相原須磨器窯跡
- g 中井1号墳

- 一凡例一
- 集落遺跡・遺物散布地
  - 墳墓群・古墳群
  - 主要古墳
  - ▲ 溝穴
  - 城跡

第2図 郷原地才工下平遺跡周辺遺跡分布図(S=1:40,000)



瀬山(標高283m)の尾根先端に立地する嶽古墳(八上1号墳)は全長30.5mの前方後円墳で、中期後半～後期前半頃の築造と言われている。曳田川2km上流部には全長55mを誇る八頭郡最大の前方後円墳中井1号墳が展開する。この間の曳田川左岸丘陵裾には6世紀後半～末葉の天神原窯跡群が分布しており6世紀代にこの地域では須恵器生産が開始されたことが明らかとなっている。千代川東岸では霊石山(標高334m)北裾に展開する稲常古墳群は82基からなる河原町最大の古墳群である。霊石山南側では八頭町米岡古墳群、福本古墳群などが分布し、河原町寄りでは千代川と八東川とが合流する平野南東の山手および郷原集落後背丘陵に古墳が集中する。山手古墳群、加賀瀬古墳群、郷原古墳群である。特に18基が確認されている山手古墳群では1号墳で盤龍鏡、7号墳で変形神獸鏡が出土したとされる。この他加賀瀬古墳群では径26mの円墳2号墳が含まれ、郷原古墳群中には全長30.5mの前方後円墳である郷原7号墳が注目される。発掘調査された小規模円墳である5世紀後半の郷原1号墳は箱式石棺から鉄刀、刀子、高杯転用枕が、6世紀後葉の11号墳は木棺直葬の墓壙内から須恵器蓋杯を主とした供献土器が、昨年度調査された5世紀中葉の方墳14号墳は木棺直葬の墓壙内から鉄剣、高杯転用枕が出土している。この他、弥生時代から続く集落遺跡として、郷原遺跡で弥生終末～古墳時代初頭の6棟の竪穴住居が、八頭町万代寺遺跡、久能寺狐塚遺跡で中期の比較的まとまった数の竪穴住居が調査されている。

**【歴史時代】** 律令体制下、この地域は因幡国八上郡石田郷に組み込まれており、中世前期には庄園化したとされる。『公卿補任』宝亀3年(772年)に八上郡の記述がみられ、大同3年(808年)八上郡と智頭郡の駅馬に関する記述もあり山陽側に連絡する交通網が開けていたことが窺える。万代寺遺跡が八上郡衙と考えられ、70×40尺の規模をもつ正殿、東西脇殿、後殿、柵列、区画溝などが検出されている。万代寺遺跡の北西に白鳳期(7世紀後半)建立の土師百井廃寺跡が配置する。法起寺式伽藍で軒丸瓦は重圈文単弁8葉蓮華文で土師百井式と言われている。この寺院の瓦を焼いた奥谷窯跡をはじめや八頭町には花原、山田、下坂など須恵器窯が多く分布し、河原町でもこの時期の集落として2km弱南西に位置する郷原遺跡で掘立柱建物10棟、土塋、柵列、単弁7葉蓮華文軒丸瓦などが出土しており、山手森谷上分遺跡でも掘立柱建物が多数検出されるなどその関連が注目される。またやや南に離れた下中溝遺跡では土馬と獣形土製品が出土している。

平安から鎌倉時代にかけて、古代の国郡里体制から荘園・公領支配へ体制が移行するなかで、因幡では律令の郷体制があまり変動しないまま中世郷へ発展したとみられ、在地領主が郡司・保司という形で国衙支配にあたった。河原町内には高野山岩田荘がある。『稲葉民談記』によると岩田荘19ヶ村の中に高津原村の名があり、高津原集落東の標高196mの通称高尾山には中世の山城である高津原城が築かれている。この丘陵北裾に展開する高福大將軍遺跡では平成13年の調査から、12世紀以降の掘立柱建物や溝状遺構、白磁や青磁が、千代川左岸の佐貫上台遺跡でも12世紀の土坑や溝状遺跡、白磁や青磁などの中世の遺物が出土している。この他にも周辺には経塚遺跡や戦国時代の小規模な山城跡が分布する。室町時代の集落遺跡である前田遺跡は、昭和58年の発掘調査によって室町時代の屋敷跡と井戸が検出され、備前、瀬戸、青磁、白磁などの陶磁器が、2基の井戸から病氣平癒のまじない呪符2枚、舟形木製品、漆椀などが出土しており、古代から中世にかけての調査例も徐々に増える傾向にある。

#### 引用・主要参考文献

- 河原町教育委員会『郷原遺跡発掘調査報告書』1986年
- 河原町『河原町誌』1986年
- 平凡社『日本歴史地名大系第32巻 鳥取県の地名』1992年
- (財)鳥取県教育文化財団『高福大將軍遺跡』2002年
- 河原町教育委員会『河原町内遺跡発掘調査報告書』2004年

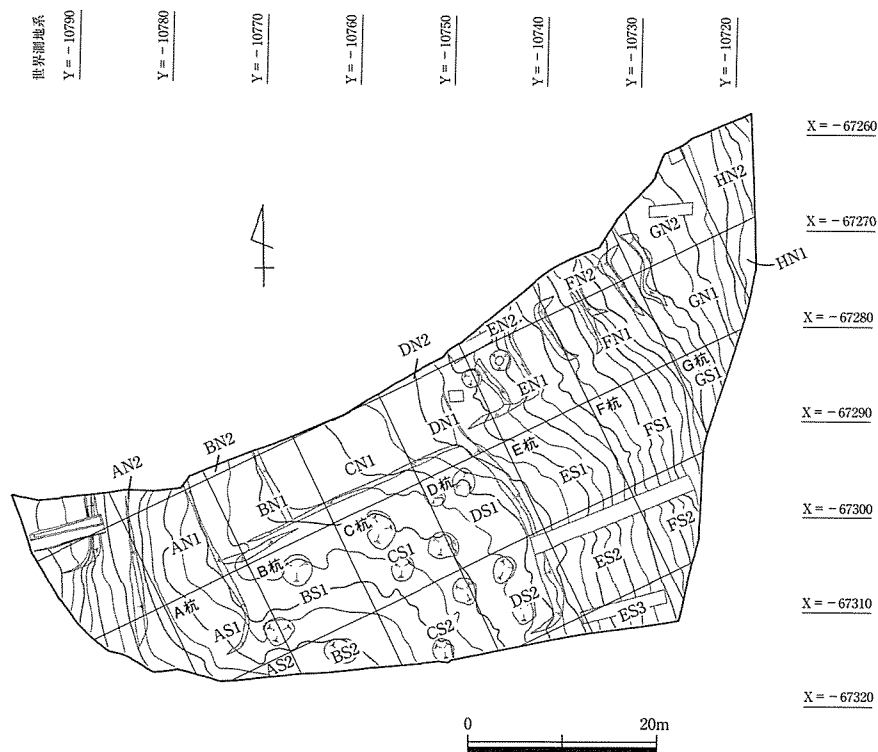
### 第3章 調査の結果

#### 第1節 調査地の立地と層序(第2～6図、図版1～3・10)

郷原地才工下平遺跡は、鳥取市河原町郷原に所在する。中国山地から派生する丘陵のうち、河原町と用瀬町の境界にそびえる医王山(標高363m)から北東へ延び、さらに北西へと下る丘陵からわずかに西方向へ張り出す小尾根の先端部、標高55～70mの南西斜面に立地する。後背の丘陵は支稜線が幾重にも複雑に広がりその頂部や尾根先端部を中心として郷原古墳群が展開する。丘陵北裾の舌状の微高地には現在郷原集落が営まれ、さらに北側には前田遺跡が立地する。

今回調査を行った調査区は、この郷原と谷をはさんで営まれる山手集落から約1.5km南に入って南東側に開けた幅40m程度の小谷をさらに150m程入った南西斜面に立地する。周囲を観察すると、後背の北西へ延びる細長い丘陵から、南西方向へ短く張り出す小尾根が複数みられ、その尾根を利用して果樹栽培が営まれている。今回の調査地もその尾根のひとつであり、幅40m弱の小尾根筋中央から南側半および谷部へかけての斜面が調査対象地である。

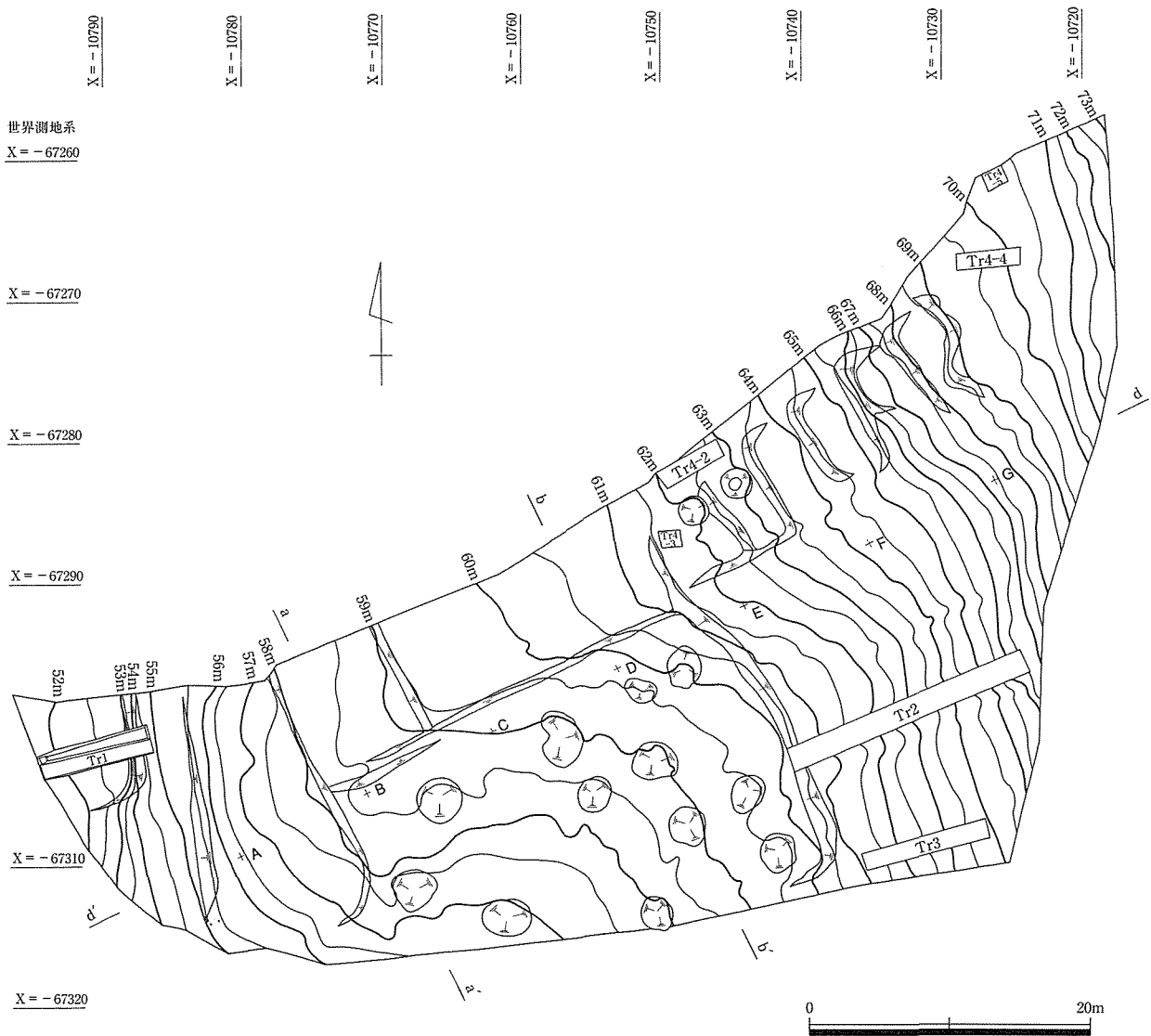
調査区の調査前の地目は果樹園で、調査前の標高は52～73mである。調査区西中央部に位置する工事路線のセンター杭No14+20をB杭として基点にし、このB杭を見通した地形傾斜に沿った調査区长軸ラインを調査の基準ラインとし、10m毎に調査用測量杭(A～H杭)を設定した。層序の観察はこのA～H杭ラインに土層観察用の土手を設けて断面で行うとともに、調査区中央にあたるD杭、調査区西側のB杭にそれぞれ直交するDN1～DS2、BN1～BS1杭ライン上に同様に土層観察用の土手を設定し、観察を行った。本格的な掘り下げ作業にかかる前に、旧河原町が行った試掘トレンチTr4-2～Tr4-5の精査と、調査区西端と南東隅にトレンチ(Tr1～3)を掘り入れ、下層層序の観察を行った。調査区は特にB～E杭南側は30×18m程度の範囲において攪乱著しく、計12基の円形の肥料穴・ゴミ穴が集中する。元々小谷部への傾斜地にあたることから利用し易かったとみられる。



第3図 郷原地才工下平遺跡調査区設定図(S = 1 : 800)



調査区断面を斜面高位側から見ていくと、斜面高位の東側では10~20cm程度の耕作土を除去すると、第2・3層赤褐色砂質土が堆積し、その下層の第4層上面はF杭まで広がり第11・13層などの時期不明の遺構状の掘り込みが認められる。さらに第8・10・12層を挟んでE杭まで広がる第9層上面に遺構面が確認できそうである。ただ、遺構の中心はE杭より下位の調査区北西側BN1~CN1区にあり、E杭以西では第1層表土を除去するとすぐ遺構が検出できる状況であった。出土遺物からも複数期が認められる。この部分については後世の果樹栽培をも加わって、本来の遺構面より上部は流失・削平を受けているとみられる。加えて、地形的にも北西側BN1~CN1区は西へ張り出す幅40m程の尾根筋先端部にあたることから、この標高57~61m付近がほぼ遺跡の中心部分と捉えることができよう。また、斜面高位のGN1区・GN2区においては、第4層下の第5層赤褐色粘質土を鉄んで、第10層黒褐色粘質土(c-c'、e-e'、f-f'断面)が広がる。この区間で第10層上面(標高67.7~68.8m付近)まで掘り下げを行ったが明確な遺構は検出されず、この上面で6世紀末~7世紀初めの須恵器杯身片や体部片が出土している。なお、調査区横断面のDN1~DS2、BN1~BS1杭ラインでは、D杭およびB杭以南は攪乱著しいものの、DS1~DS2杭ラインでは標高57.3m前後で第65層黒褐色粘質土を確認した。GN1区・GN2区における第10層との関係は明らかではないが、全体的に谷部の堆積の様相を示す。



第4図 郷原地才工下平遺跡調査前地形図(S=1:500)

## 第2節 調査の結果

### 1. 竪穴住居

#### SI-01(第7～10図、図版4・5・9・10)

調査区北西辺中央西寄りのBN1区・CN1区境界部、標高59.30～59.66mでSI-01を検出した。流失によるものか南西辺の壁溝および壁面を失い、南西部で後世のピットP-24、25が重複する。遺存する北東側コ字部分から平面方形を呈すると考えられる。地形の傾斜に対応した主軸をとり、N-32°-Eを振る。検出面で、東西辺4.05m、南北辺は遺存長3.45mを測るが、主柱穴SPI-1とSPI-4と壁面との距離を加味すると、ほぼ4.05m四方の建物と推定される。検出面から床面までの深さは36cmを測る。床面は標高59.30～59.46mと16cm程の比高差がみられ、全体的に北西側が高く南東側で低くなる。壁溝は5、6cmの深さを持ち、床面に比例して北西側で標高59.41m、北東側で59.30mと溝底についても比高差が認められる。

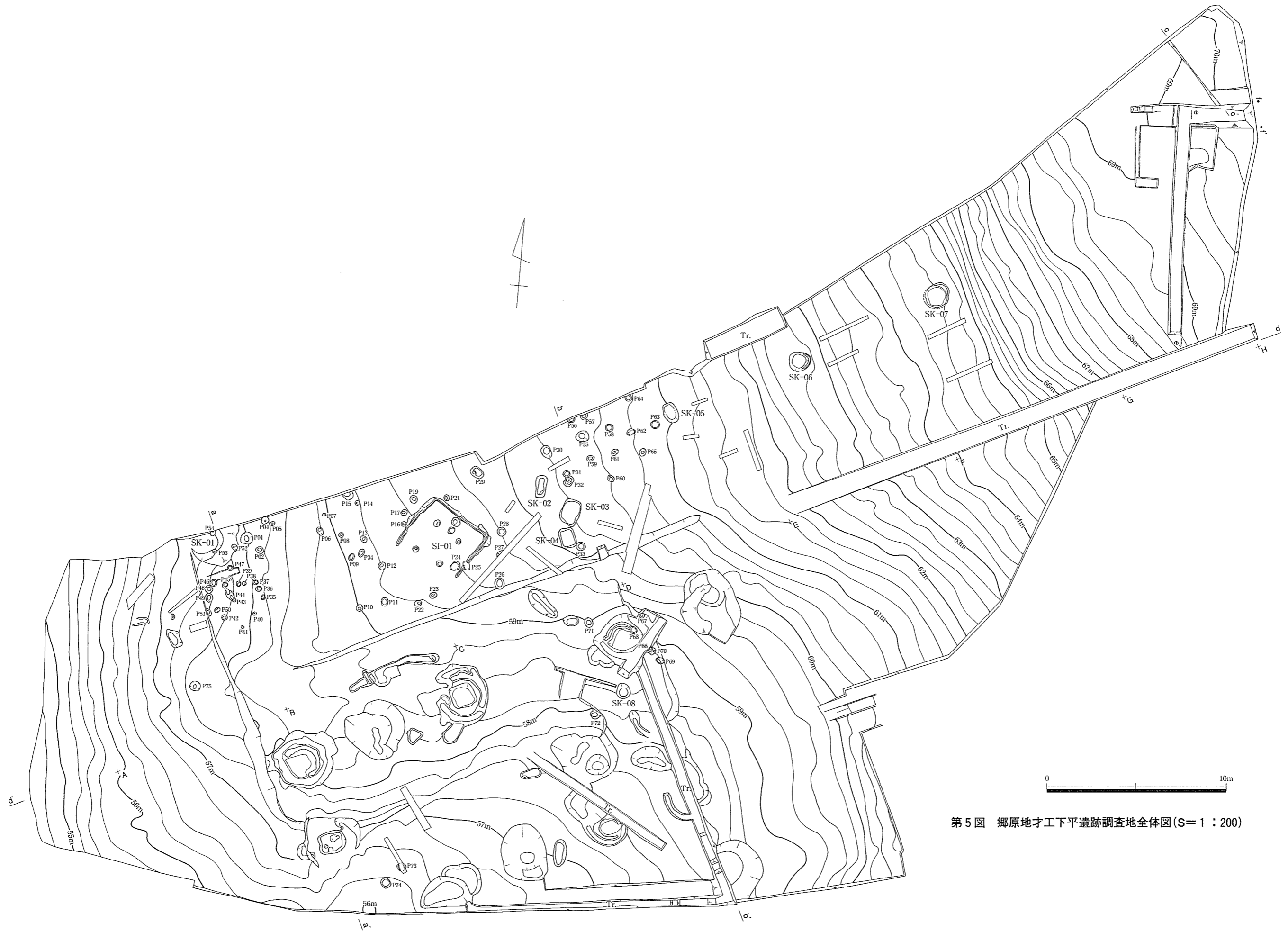
主柱穴4本(SPI-1～SPI-4)は壁溝からそれぞれ0.9～1m程度離れて配置している。このほかにSPI-5、6が斜面高位側中央壁面寄りに南北方向に並んで検出されている。各柱穴は平面やや楕円径を呈するものの径34～38cm程度、深さ34～39cm、底面標高は58.89～58.96mを測る。

主柱穴間の距離は、SPI-1～SPI-2間が1.62m、SPI-2～SPI-3間が1.65m、SPI-3～SPI-4間がやや離れて1.83m、SPI-4～SPI-1間が1.51mである。土層断面観察によりSPI-2、SPI-4は柱痕跡が観察された。SPI-5、6は、壁際のSPI-5が大きく長径51cmを測るが主柱穴4本(SPI-1～SPI-4)とさほど法量や形態に差は認められないものの全体的にやや浅く、底面標高はSPI-5が59.04m、SPI-6が59.09mを測る。

埋土は基本的に二層で、上層から第2層褐色粘質土(礫を少し含む。)、下層は第4層褐色粘質土(2・3より明。炭片を含む。礫を含む。)である。下層と柱穴の埋土に炭片が目立つ。また、北東壁面際中央部に32×23cm、厚さ5cm前後の炭化範囲があり、また北西壁面際では辺に直交する軸で垂木と見られる炭化した板状の角材が2本検出されている。よってこの住居は後に片付けられてはいるものの所謂焼失住居とみられる。

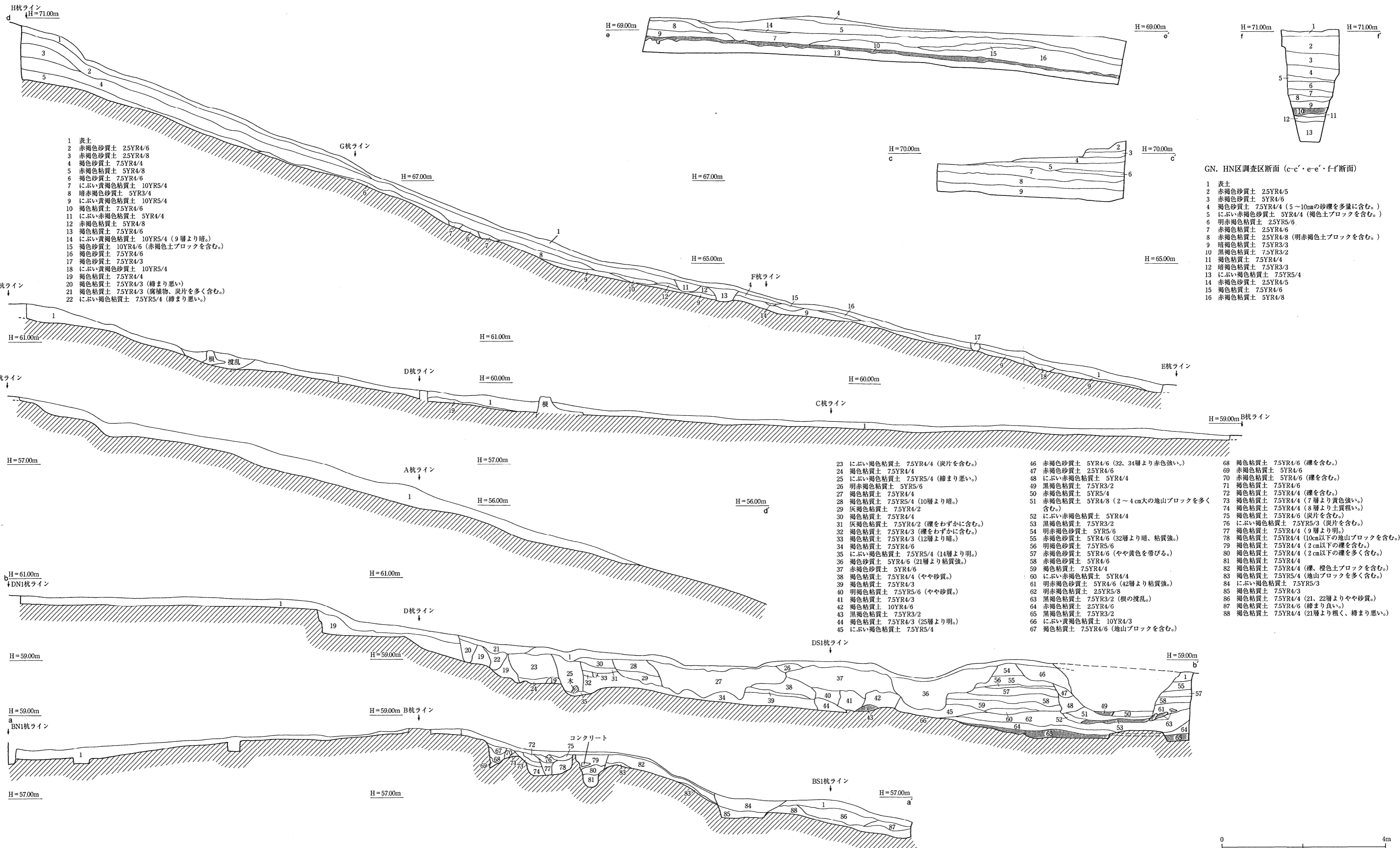
遺物はほとんどが遺構検出面である第2層から第4層上面にかけての出土であり、コンテナ(容量54×34×20cm)約3箱分に相当する。竈片や体部片など摩滅した土師器細片が多く、僅かに須恵器片、石製品、自然石がある。床面直上の遺物は見られない。その中で、北東隅寄りで、壺(1)、壺(2)、甑(4)が比較的まとまった状態で検出された。特に(2)はほぼ完存、土圧で潰れた状況であった。38×18.4×10.7cmの自然石についても底面は床面から4～10cm程度浮いて斜めに傾斜していた。

壺(1)は口縁部は外反度がそれほど大きくはなく、ヨコナデにより丁寧に引き伸ばされ端部で更に外反する。体部1/3上半に最大胴径をもち底部はやや扁平化するものの長胴化には至らない。小型の壺(2)は口縁部は外反し体部は肩部張ることなしに尖り気味の丸底へと続く。甕(3)は口縁部のみの出土で、全体的に器壁が厚くぼつりした印象で、外反して開き端部で摘み尖って終える口縁部である。それに対し、甑(4)は、薄く丁寧な作りで、口縁部は僅かに外反するものの端部も丸く丁寧に処理される。体部中位に把手の接合基部が遺存するが外面は把手を含めタテハケで丁寧に調整される。竈(5)(6)はいずれも全体を推測するに遠く及ばない破片であるが、(5)は粘土輪積痕から基部近くの焚口部位とみられ廂からの流れで断面三角形の突帯が観察される。基部(6)は1.5cm程度の厚さで底面はカットされ平坦に調整され、外面の調整も均一なタテハケであることから甑同様丁寧な作りの竈であったと考えられる。磨石(7)は長軸4面の粗砥ぎ用の砥石に加工しようとした石材とみられ、3面に僅かな使用痕が観察される。自然石(8)は長軸38cmを測り、側面1面に擦痕が観察される。接合する剥片が1.5m離れた炭化した垂木の近くで見つまっているが、二次焼成の痕跡は確認できない。この他、(9)(10)以外に須恵器細片10点が出土している。(9)(10)とほぼ同様な特徴をもち、杯身受部細片も含まれる。



第5図 郷原地才工下平遺跡調査地全体図(S=1:200)



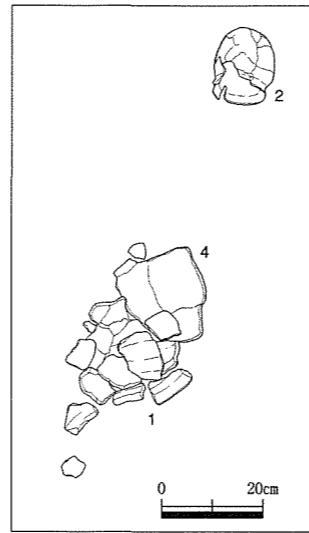
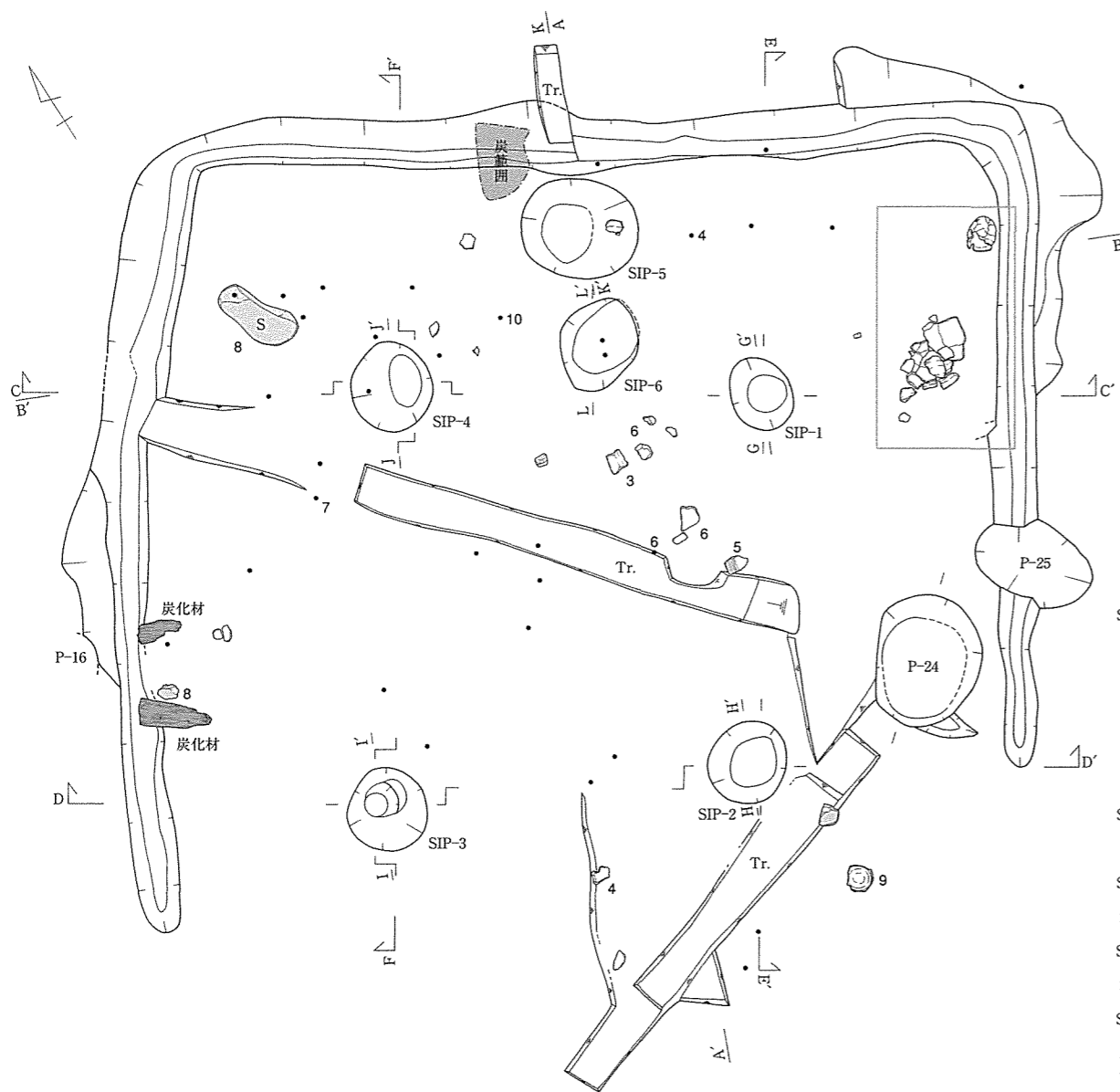


- 1 表土
- 2 赤褐色砂質土 25YR4/6
- 3 赤褐色砂質土 25YR4/8
- 4 褐色砂質土 7.5YR4/4
- 5 赤褐色粘質土 5YR4/8
- 6 褐色粘質土 7.5YR4/6
- 7 にぶい黄褐色粘質土 10YR5/4
- 8 暗赤褐色砂質土 5YR3/4
- 9 にぶい黄褐色粘質土 10YR5/4
- 10 褐色粘質土 7.5YR4/6
- 11 にぶい赤褐色粘質土 5YR4/4
- 12 赤褐色粘質土 5YR4/8
- 13 褐色粘質土 7.5YR4/6
- 14 にぶい黄褐色粘質土 10YR5/4 (9層より暗)
- 15 褐色砂質土 10YR4/6 (赤褐色土ブロックを含む)
- 16 褐色砂質土 7.5YR4/6
- 17 褐色砂質土 7.5YR4/3
- 18 にぶい黄褐色砂質土 10YR5/4
- 19 褐色粘質土 7.5YR4/4
- 20 褐色粘質土 7.5YR4/3 (締まり悪い)
- 21 褐色粘質土 7.5YR4/3 (腐植物、炭片を多く含む)
- 22 にぶい褐色粘質土 7.5YR5/4 (締まり悪い)

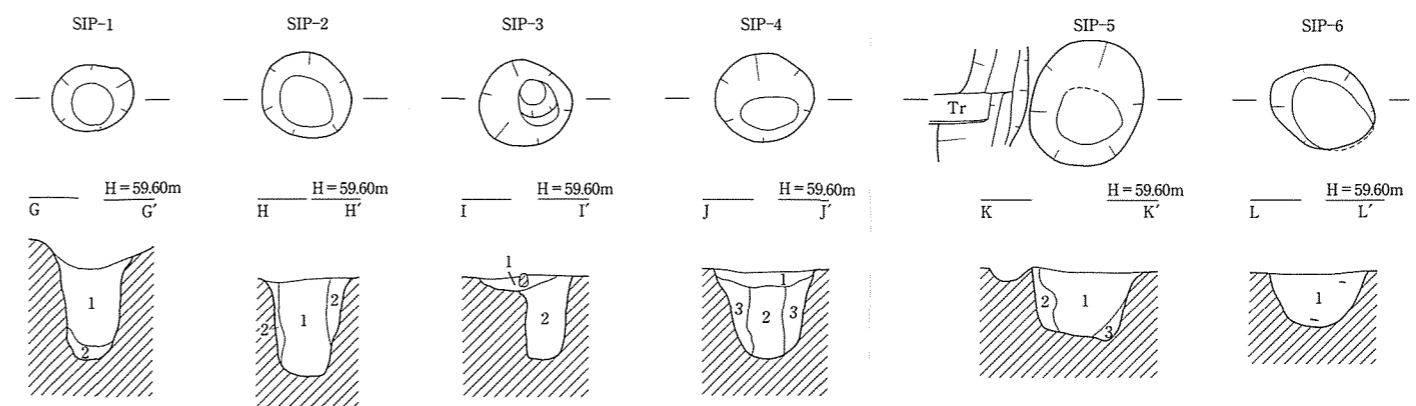
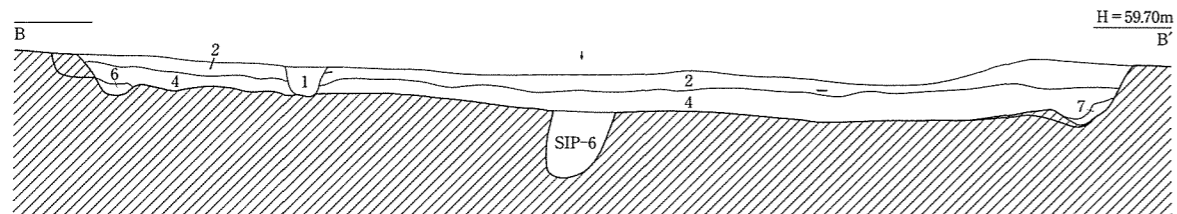
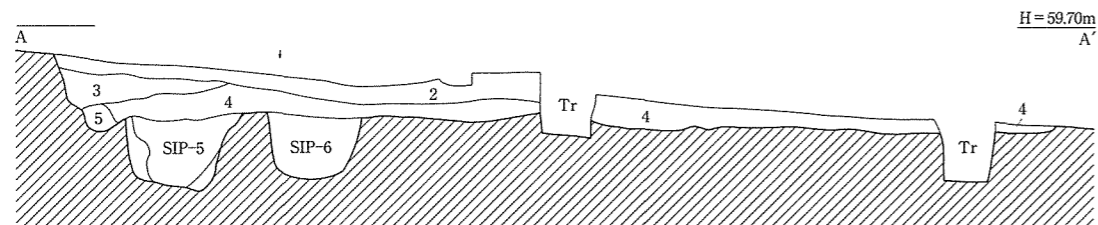
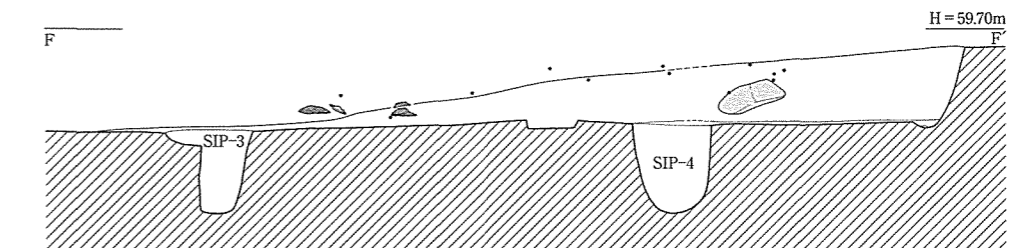
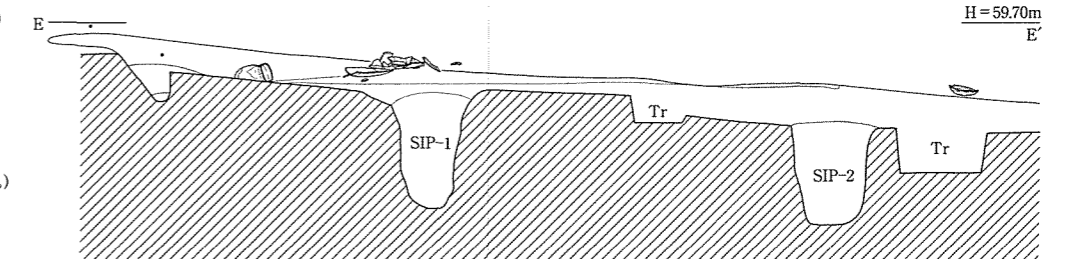
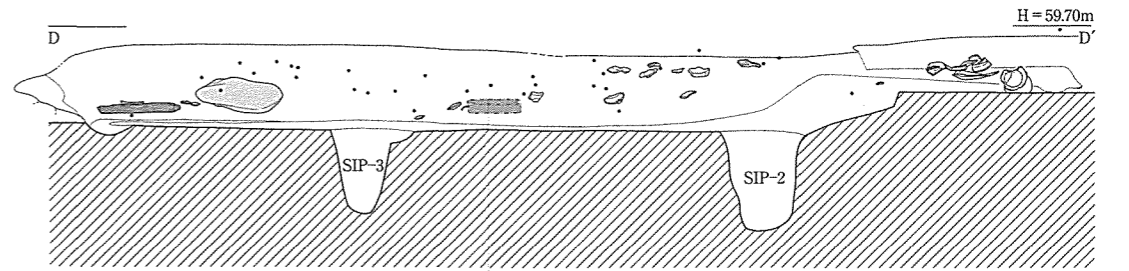
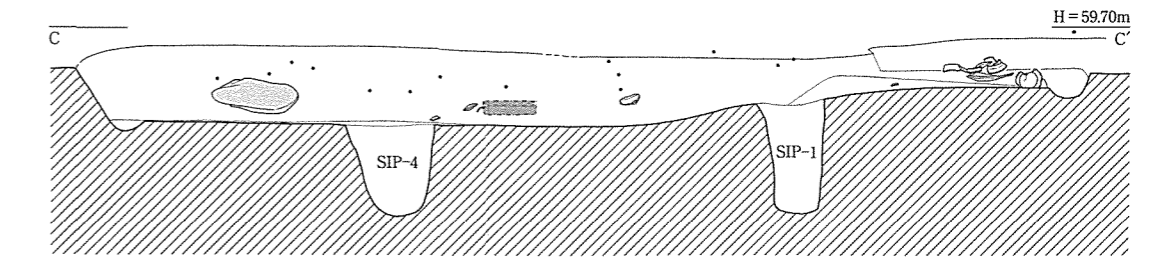
- 23 にぶい褐色粘質土 7.5YR4/4 (炭片を含む)
- 24 褐色粘質土 7.5YR4/4
- 25 にぶい褐色粘質土 7.5YR5/4 (締まり悪い)
- 26 明赤褐色粘質土 5YR5/6
- 27 褐色粘質土 7.5YR4/4
- 28 褐色粘質土 7.5YR5/4 (10層より暗)
- 29 灰褐色粘質土 7.5YR4/2
- 30 褐色粘質土 7.5YR4/4
- 31 灰褐色粘質土 7.5YR4/2 (礫をわずかに含む)
- 32 褐色粘質土 7.5YR4/3 (礫をわずかに含む)
- 33 褐色粘質土 7.5YR4/3 (12層より暗)
- 34 褐色粘質土 7.5YR4/6
- 35 にぶい褐色粘質土 7.5YR5/4 (14層より明)
- 36 褐色砂質土 5YR4/6 (21層より粘質強)
- 37 赤褐色砂質土 5YR4/6
- 38 褐色粘質土 7.5YR4/4 (やや砂質)
- 39 褐色粘質土 7.5YR4/3
- 40 明褐色粘質土 7.5YR5/6 (やや砂質)
- 41 褐色粘質土 7.5YR4/3
- 42 褐色粘質土 10YR4/6
- 43 黒褐色粘質土 7.5YR3/2
- 44 褐色粘質土 7.5YR4/3 (25層より明)
- 45 にぶい褐色粘質土 7.5YR5/4
- 46 赤褐色砂質土 5YR4/6 (32、34層より赤色強い)
- 47 赤褐色砂質土 25YR4/6
- 48 にぶい褐色粘質土 7.5YR5/4 (礫を含む)
- 49 黒褐色粘質土 7.5YR3/2
- 50 赤褐色粘質土 5YR5/4
- 51 赤褐色粘質土 5YR4/8 (2~4cm大の地山ブロックを多く含む)
- 52 にぶい赤褐色粘質土 5YR4/4
- 53 黒褐色粘質土 7.5YR3/2
- 54 明赤褐色砂質土 5YR5/6
- 55 赤褐色砂質土 5YR4/6 (32層より暗、粘質強)
- 56 明褐色砂質土 7.5YR5/6
- 57 赤褐色砂質土 5YR4/6 (やや黄色を帯びる)
- 58 赤褐色砂質土 5YR4/6
- 59 褐色粘質土 7.5YR4/4
- 60 にぶい赤褐色粘質土 5YR4/4
- 61 明赤褐色粘質土 5YR4/6 (42層より粘質強)
- 62 明赤褐色粘質土 25YR5/8
- 63 黒褐色粘質土 7.5YR3/2 (根の擾乱)
- 64 赤褐色粘質土 25YR4/6
- 65 黒褐色粘質土 7.5YR3/2
- 66 にぶい黄褐色粘質土 10YR4/3
- 67 褐色粘質土 7.5YR4/6 (地山ブロックを含む)
- 68 褐色粘質土 7.5YR4/6 (礫を含む)
- 69 赤褐色粘質土 5YR4/6
- 70 赤褐色粘質土 5YR4/6 (礫を含む)
- 71 褐色粘質土 7.5YR4/6
- 72 褐色粘質土 7.5YR4/4 (礫を含む)
- 73 褐色粘質土 7.5YR4/4 (7層より黄色強い)
- 74 褐色粘質土 7.5YR4/4 (8層より土質粗い)
- 75 褐色粘質土 7.5YR4/6 (炭片を含む)
- 76 にぶい褐色粘質土 7.5YR5/3 (炭片を含む)
- 77 褐色粘質土 7.5YR4/4 (9層より明)
- 78 褐色粘質土 7.5YR4/4 (10cm以下の地山ブロックを含む)
- 79 褐色粘質土 7.5YR4/4 (2cm以下の礫を含む)
- 80 褐色粘質土 7.5YR4/4 (2cm以下の礫を多く含む)
- 81 褐色粘質土 7.5YR4/4
- 82 褐色粘質土 7.5YR4/4 (礫、橙土ブロックを含む)
- 83 褐色粘質土 7.5YR5/4 (地山ブロックを多く含む)
- 84 にぶい褐色粘質土 7.5YR5/3
- 85 褐色粘質土 7.5YR4/3
- 86 褐色粘質土 7.5YR4/4 (21、22層よりやや砂質)
- 87 褐色粘質土 7.5YR4/6 (締まり良い)
- 88 褐色粘質土 7.5YR4/4 (21層より粗く、締まり悪い)

GN. HN区調査区断面 (c-e'·e-e'·f-f'断面)

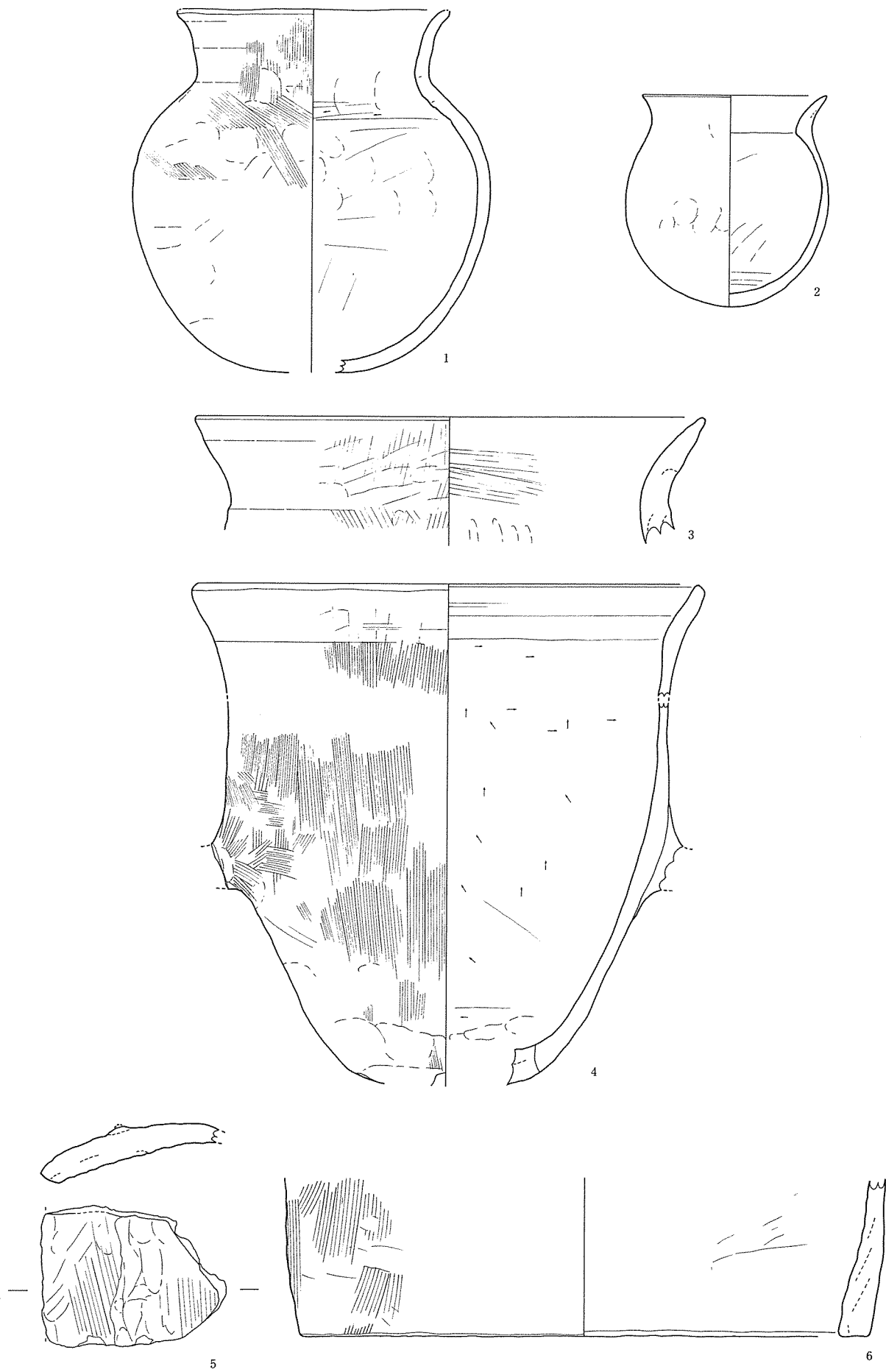
第6図 郷原地才工下平遺跡調査地土層断面図(S=1:80)



- SI-01
- 1 褐色粘質土 7.5YR4/3
  - 2 褐色粘質土 7.5YR4/4 (1より明。礫を少し含む。)
  - 3 褐色粘質土 7.5YR4/4 (2より暗。)
  - 4 褐色粘質土 7.5YR4/6 (2・3より明。炭片を含む。礫を含む。)
  - 5 明褐色粘質土 7.5YR5/6
  - 6 褐色粘質土 7.5YR4/6 (2より明で5より暗。)
  - 7 褐色粘質土 10YR4/4 (4より黄色かかる。)
- SIP-1
- 1 褐色粘質土 7.5YR4/4 (炭片を多く含む。5mm前後の礫を含む。)
  - 2 にぶい黄褐色粘質シルト 10YR5/3
- SIP-2
- 1 褐色粘質土 7.5YR4/3 (炭片を多く含む。僅かに礫を含む。)
  - 2 褐色粘質土 7.5YR4/6 (1より明。)
- SIP-3
- 1 褐色粘質土 7.5YR4/3
  - 2 褐色粘質土 7.5YR4/4 (2より明。僅かに炭片を含む。)
- SIP-4
- 1 灰褐色粘質土 7.5YR4/2 (炭片を含む。)
  - 2 褐色粘質土 7.5YR4/4 (3より暗。炭片を僅かに含む。)
  - 3 褐色粘質土 7.5YR4/4 (2より明。)
- SIP-5
- 1 黒褐色粘質土 7.5YR3/2 (炭片を含む。褐色土を含む。)
  - 2 にぶい褐色粘質土 7.5YR5/4
  - 3 にぶい黄褐色粘質土 10YR4/3
- SIP-6
- 1 にぶい褐色粘質土 7.5YR5/4

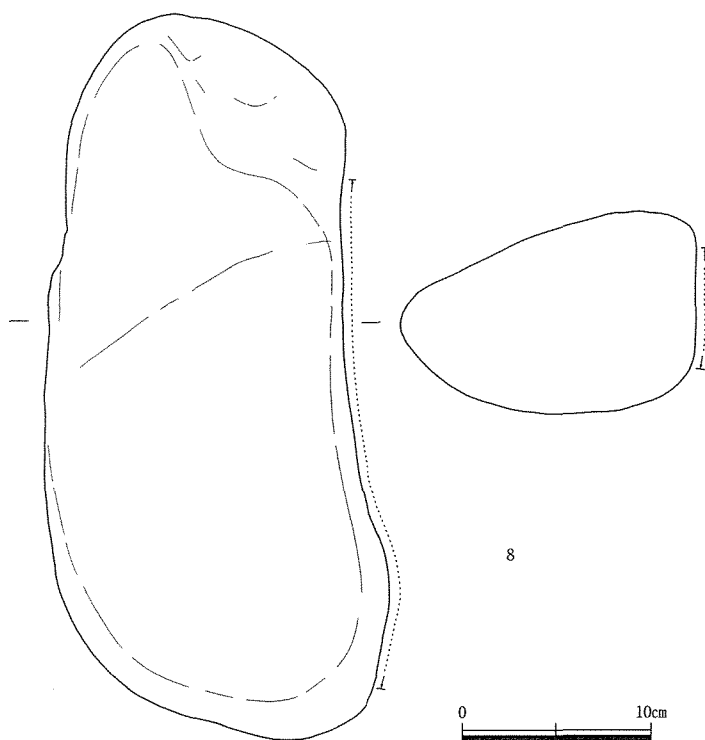
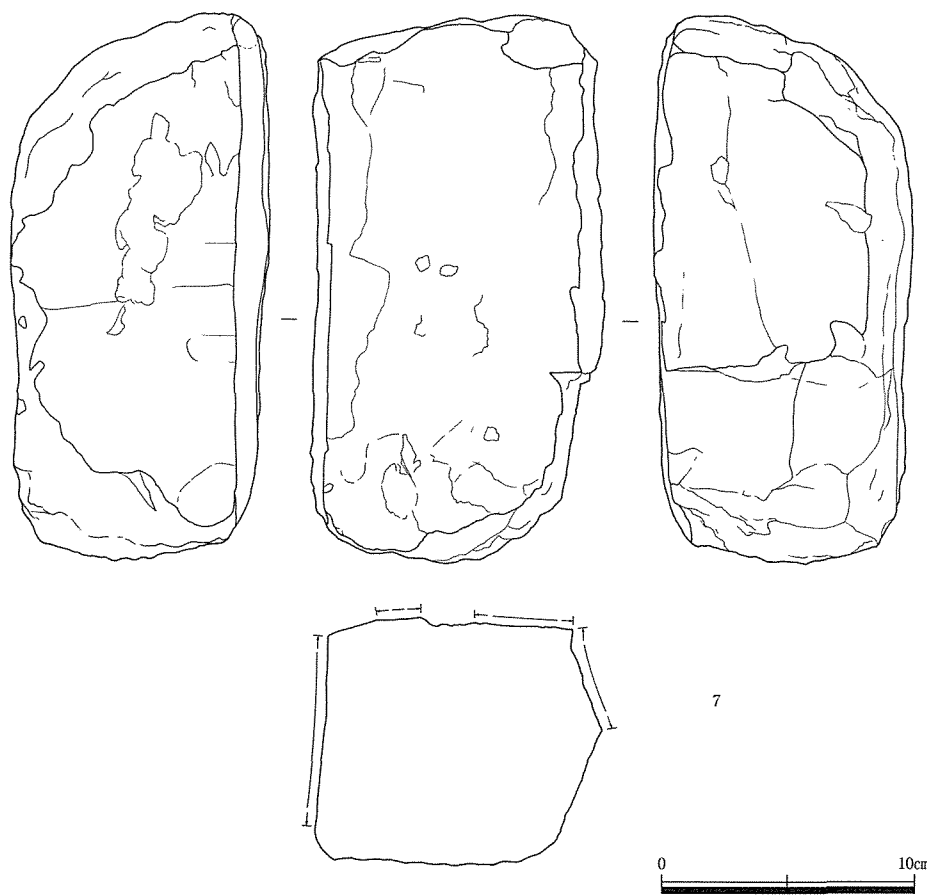


第7図 SI-01実測図(S=1:30)

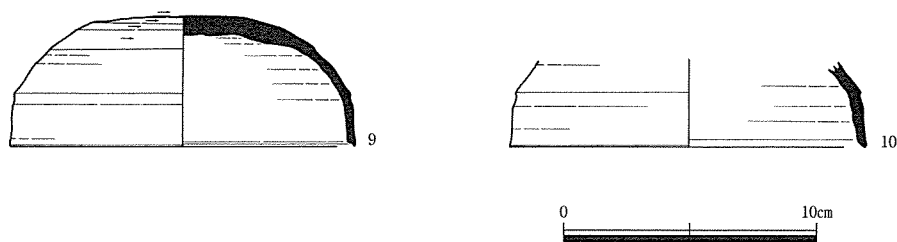


第8图 SI-01出土遺物実測図(1)(S=1:3)





第9図 SI-01出土遺物実測図(2)(S=1:3、1:4)



第10図 SI-01出土遺物実測図(3)(S=1:3)

(9)は丸味をもつ天井部、鈍い稜をもち、口縁部はさほど長く伸びず端部は内傾する段を有する。(10)も段が(9)に比べて鈍いもののほぼ同様な径で形態の口縁部である。

## 2. 土 坑

### SK-01(第11・12図、図版6・10)

調査区北西、AN1区・AN2区境界に位置する。標高57.54mで検出した。北西側は調査区域外である。上層および南東側一帯にはピットが密集して配置し、壁面の一部をP-53、54に切られる。西側斜面下位は流失する。遺存する東側の形状より平面は楕円形を呈するとみられる。長さ、1.97m、幅1.21mが遺存する。主軸は現状でN-32°-Eを振る。断面は不整な椀状である。底面はやや凹凸がみられ中央部が窪む。検出面からの深さ43cm、底面は標高57.09mを測る。埋土は第1～11層に分かれ、第1層にぶい褐色粘質土、第2層褐色粘質土が主体となるが、北西側で第6・7層灰褐色粘質土が入り込む比較的複雑な堆積である。

遺物は埋土から土師器細片を中心に1袋分が出土しておりその中に、製塩土器(1)須恵器杯蓋(2)が含まれる。他に平面図に記される竈廂部片、布目の観察される須恵質瓦片があり、いずれも第2もしくは4層中の出土と考えられる。製塩土器(1)は復元口径12.3cm。内湾して肥厚する口縁部で僅かに内面に布目痕が観察される。杯蓋(2)は推定口径11.2cmと小型で天井部は丸く天井部約2/3上半をヘラ削りする。鈍い稜以下口縁部は中程で厚さを減じ端部は凹面状となる内傾段を有する。SI-01出土の須恵器(第10図9・10)より若干古相の特徴をもつ。

### SK-02(第13図、図版6)

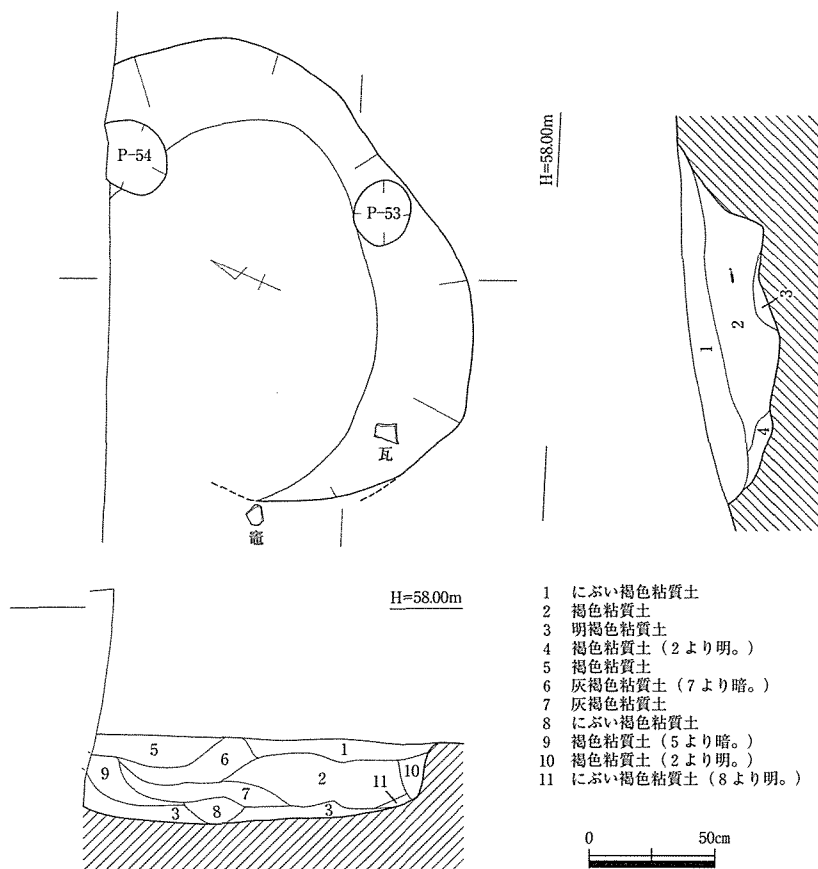
調査区中央北端、CN1区北東に位置する。標高60.16mで検出した。南東1.3mにSK-03、04が、北東一帯にピット群が、南西3.5mにSI-01が配置する。平面はやや不整な隅丸長方形を呈し、長さ1.23m、幅0.60mを測る。主軸は斜面の傾斜に制約されることなくN-12°-Eを振る。断面はやや不整な皿状となる。底面は南側がやや低くなるもののほぼ平坦で、検出面からの深さ14cm、底面は標高60.02mを測る。埋土は2層に分かれ礫を含む褐色粘質土である。遺物の出土はみられなかった。

### SK-03(第14図、図版6)

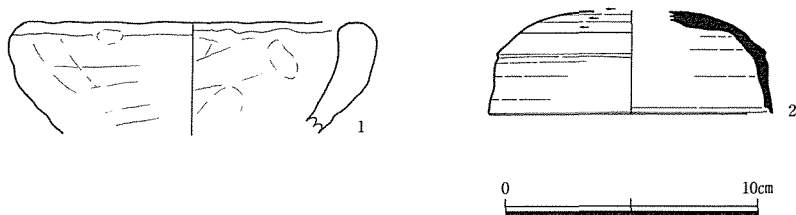
調査区中央北寄り、CN1区東に位置する。標高60.32mで検出した。北西1.3mにSK-02、南接してSK-04が、北東一帯にピット群、西4mにSI-01が配置する。平面は南隅が張り出すやや不整な隅丸長方形を呈し、長さ1.40m、幅1.07mを測る。主軸は斜面の傾斜にさほど制約されることなくN-17°-Eを振る。底面は南側がやや低くなるもののほぼ平坦で、検出面からの深さ25cm、底面は標高60.07mを測る。埋土は2層に分かれ礫を含む褐色粘質土である。遺物の出土はみられなかった。

### SK-04(第15図、図版7)

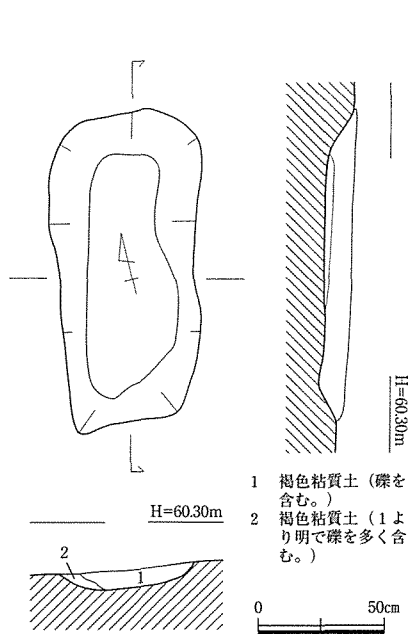
調査区中央やや北寄り、CN1区東に位置する。標高60.18mで検出した。北接してSK-03が、南西側にP-33が、西4mにSI-01が配置する。平面はやや南北に長い隅丸長方形を呈し、長さ1.11m、幅0.85mを測る。主軸は斜面の傾斜にほぼ平行なN-23°-Wを振る。断面は緩やかな逆台形状である。底面は



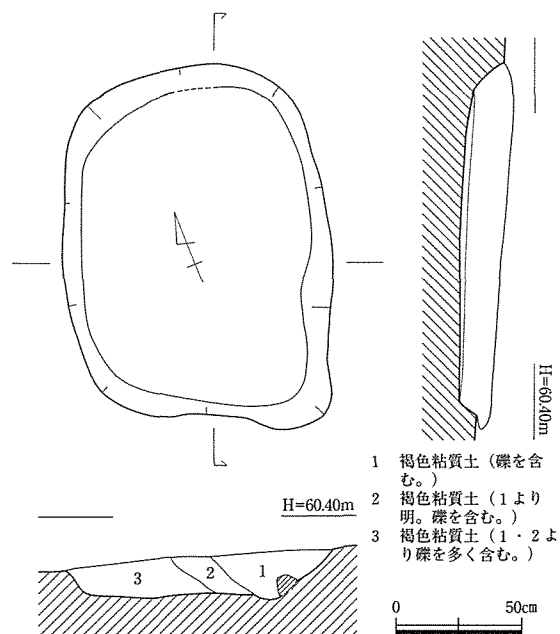
第11図 SK-01実測図 (S = 1 : 30)



第12図 SK-01出土遺物実測図 (S = 1 : 3)

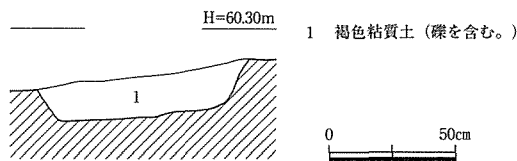
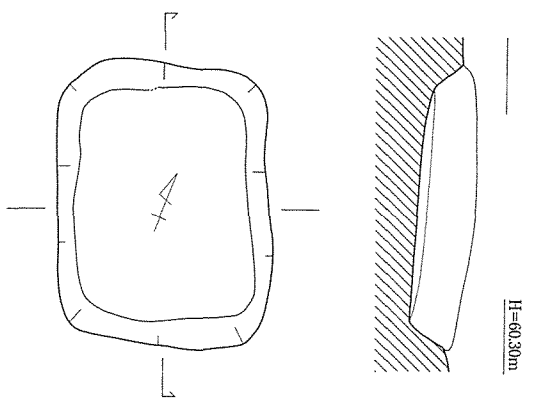


第13図 SK-02実測図 (S = 1 : 30)

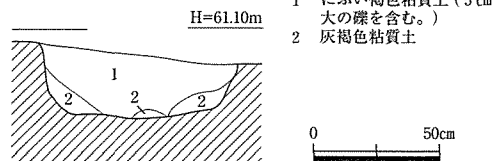
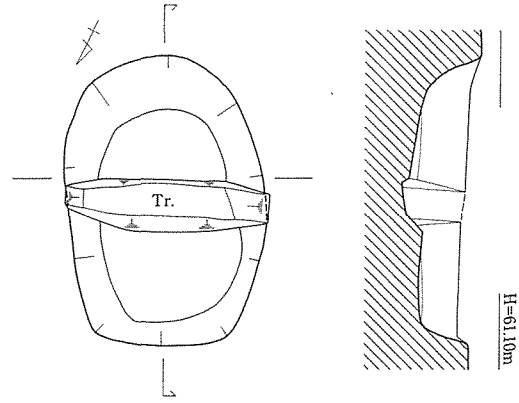


第14図 SK-03実測図 (S = 1 : 30)

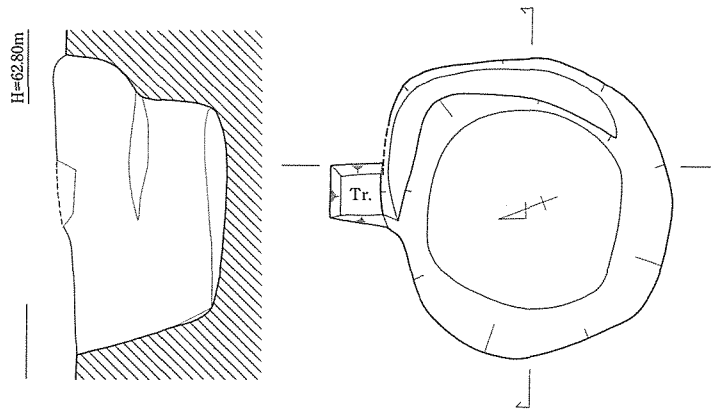




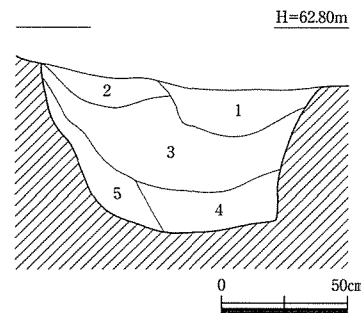
第15図 SK-04実測図 (S = 1 : 30)



第16図 SK-05実測図 (S = 1 : 30)



- 1 褐色粘質土 (2~3cm大の地山礫点在。)
- 2 褐色粘質土 (1より明。)
- 3 褐色粘質土 (1より明。1~3cm大の地山礫を多く含む。)
- 4 黄褐色粘質土 (3~4cm大の地山礫点在。)
- 5 褐色砂質土

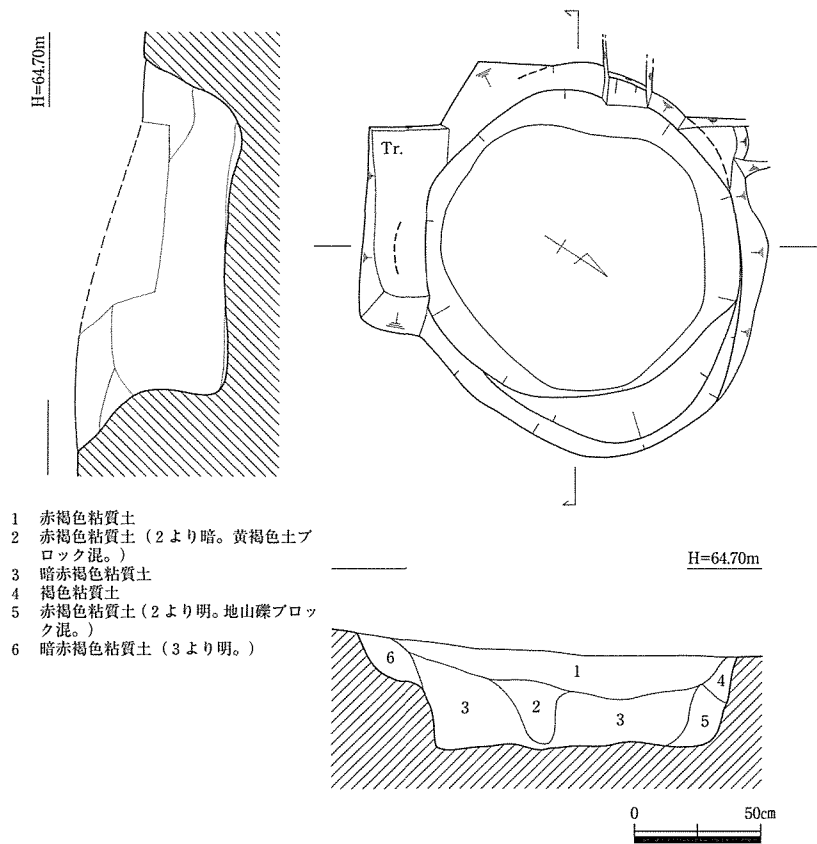


第17図 SK-06実測図 (S = 1 : 30)

全体に南側が低く傾斜し、検出面からの深さ26cm、底面は標高59.92mを測る。埋土は1層で礫を含む褐色粘質土である。遺物の出土はみられなかった。

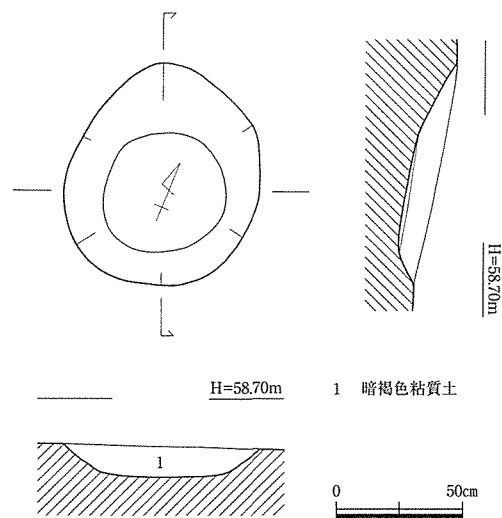
**SK-05**(第16図、図版7)

調査区中央北端、DN1区北に位置する。標高61.05mで検出した。西側一帯にP-63を始めピット群が、東側斜面高位に6.8mの等間隔でSK-06、07が配置する。平面はやや北側が角張る楕円形を呈し、長さ1.14m、幅0.78mを測る。主軸は斜面の傾斜にほぼ平行なN-32°-Wを振る。断面は椀状である。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さ30cm、底面は標高60.75mを測る。埋土は2層に分かれ、底面付近は灰褐色粘質土である。遺物の出土はみられなかった。



- 1 赤褐色粘質土
- 2 赤褐色粘質土 (2より暗。黄褐色土ブロック混。)
- 3 暗赤褐色粘質土
- 4 褐色粘質土
- 5 赤褐色粘質土 (2より明。地山礫ブロック混。)
- 6 暗赤褐色粘質土 (3より明。)

第18図 SK-07実測図 (S = 1 : 30)



第19図 SK-08実測図 (S = 1 : 30)

#### SK-06(第17図、図版7)

調査区中央北東端、EN1区北に位置する。標高62.66mで検出した。西側6.8mにSK-05が、東側6.8mにSK-07が配置し、この3基のSK-05~07は斜面の傾斜に対し直交する一直線上に等間隔で並ぶ。平面は北東隅が張り出す不整円形を呈し、長径1.19m、短径1.16mを測る。北東隅は角張って幅10cm弱のL字形に廻る内傾したテラス部分を有する。断面は不整な椀状である。底面は中央部がやや窪み、検出面からの深さ67cm、底面は標高61.99mを測る。埋土は5層に分かれ、最下層の第5層は褐色砂質土、第4層は黄褐色粘質土である。遺物の出土はみられなかった。

### SK-07(第18図、図版7)

調査区北東、FN1区北西に位置する。標高64.45mで検出した。西側6.8mにSK-06が、更に西側6.8mにSK-05が配置し、3基のSK-05～07は斜面の傾斜に対し直交する一直線上に等間隔で並ぶ。平面は北東隅が若干張り出す不整な楕円形を呈し、長径1.53m、短径1.37mを測る。主軸は斜面の傾斜にさほど制約は認められないN-22°-Eを振る。南側上位は一部テラス部分を有する。断面は逆台形状である。底面は僅かに凹凸が見られるもののほぼ平坦で、検出面からの深さ51cm、底面は標高63.94mを測る。埋土は6層に分かれ、主に赤褐色～暗赤褐色粘質土からなる。

埋土中から須恵器胴部片1点が出土しており、外面はカキ目調整下に平行叩き目が一部観察される。

### SK-08(第19図)

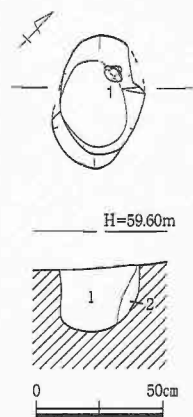
調査区中央部、CS1区東に位置する。標高58.58mで検出した。周囲は果樹栽培の際の肥料穴等の攪乱穴が点在するものの、P-67～72が配置するエリアの南端にあたる。平面は北東部が若干張り出す不整な楕円形を呈し、長径0.87m、短径0.77mを測る。主軸は斜面の傾斜にさほど制約は認められないN-21°-Wを振る。断面は皿状で、底面は南へ向けて傾斜する。検出面からの深さ22cm、底面は標高58.36mを測る。埋土は1層で暗褐色粘質土である。遺物の出土はみられなかった。

## 3. その他の遺構と遺物

### ピット状遺構(第20・21図、図版8・10)

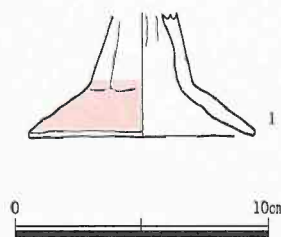
調査区内で計72基のピット状遺構を検出した。分布の中心は、調査区北側のBN1杭周辺の標高57～58m弱と、SI-01周辺部、調査区中央北辺の標高60～61m付近である。調査区南側では特に攪乱および掘削が著しかったB～D杭南側一帯においても若干ながらピットの検出がみられ、D杭南西側の58～59m一帯、調査区南西端のBS1杭南東側標高56m弱付近で計8基を検出している。各ピットについては法量や底部標高、出土遺物などの一覧を表にまとめた。土層断面の観察から柱痕跡およびそれに準じる層序が認められるピットも比較的にみられ、SK-01南側周辺やSI-01周辺、P-55・58・59・61など良好な柱穴状のピットが認められるものの建物の特定には至らなかった。

遺物が出土したのは、わずかにP-24、25、26、46、48、66、70であり、いずれも細片1点あるいは数点である。このうちP-46では製塩土器口縁部細片、P-48、66では所謂で字形のかえりのない杯蓋口縁部片が出土している。また、長径52cm、深さ25cmを測るP-25(第20図)は土層断面の観察からSI-01を切る上層の遺構であるが、流れ込んだ状況で埋土第1層中位の北壁際で高杯脚部(第21図1)が出土している。(1)は復元底径8.9cmを測り、脚柱部は太く短くハ字形に開いて屈曲し裾部へ続く。外面に赤彩痕を観察する。



第20図 P-25実測図  
(S=1:30)

- 1 褐色粘質土(赤褐色土を含む。)
- 2 褐色粘質土(1より暗。赤色強い。)

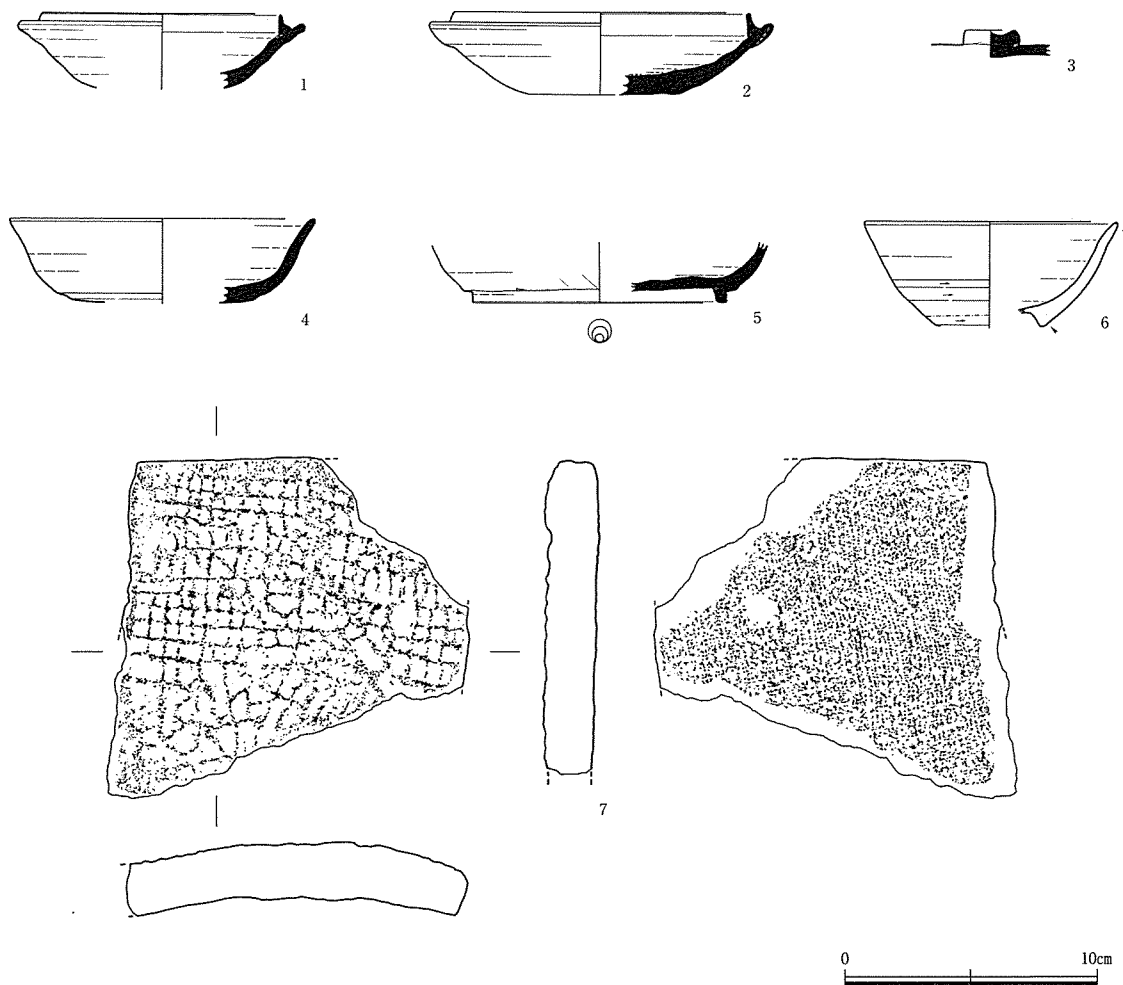


第21図 P-25出土遺物実測図  
(S=1:3)

遺構外出土遺物(第22図、図版11)

遺構以外から出土した遺物として、コンテナ(容量54×34×20cm)1箱分に相当する量が出土している。多くは表土や攪乱土中から出土した遺物で、遺構が集中するBN1・CN1区や攪乱著しいBS1・CS1区での出土が目立つ。また、調査区北東端のGN区においても6世紀末から7世紀の須恵器や土師器甕などが出土している。

遺物は土師器、須恵器、土師質瓦、須恵質瓦、陶器片がある。これらのほとんどは土師器体部細片や須恵器蓋杯および体部片で、陶器は実測した(6)を合わせわずかに5点であり播鉢類等の破片は見られない。主な遺物について(1)~(7)を図化した。須恵器杯身(1)(2)は、ともに立ち上がりは短く上方へ摘み出された程度で、受部も鈍く丸い。(2)は底部外面は扁平で外周にヘラ削りが観察されるも底部はヘラ切り後ナデが施される。蓋の摘部(3)は径1.9cmを測る全体的に扁平なボタン状であるが、強いナデにより中央がやや盛り上がった形状となる。杯(4)は推定口径11.7cm、やや小型で底部からゆるやかに屈曲、外反して先細りの口縁端部へ続く。底部外面はナデである。杯の高台部(5)は復元底径10.0cm、外周よりやや内側に僅かに外傾する短い高台を貼り付ける。底部外面は糸切りである。椀(6)は口径9.9cm、底部外面を削り出して高台とし、高台脇~底部は拭き取りにより無釉である。釉は灰白色。土師質平瓦(7)は凸面は格子叩き目、凹面は布目でともに後のナデは施さず、端面は削って平坦面としている。厚さ2.3cmを測る。この他厚さ1.4cmの硬質の須恵質平瓦がCN区表土より出土しており、凸面は工具ナデ、凹面は布目後工具ナデ、端面は削って平坦面としナデを加えて縁も処理している。



第22図 遺構外出土遺物実測図(S=1:3)



第1表 ピット状遺構一覧表

Pit名	径(cm)	底部高(m)	柱痕跡	出土遺物	グリッド	Pit名	径(cm)	底部高(m)	柱痕跡	出土遺物	グリッド
P-01	70×64	57.83		—	BN1	P-39	28×26	57.70		—	AN1
P-02	44×39	58.01		—	BN1	P-40	22×19	57.88		—	BN1
P-03	欠番					P-41	17×15	57.66		—	AN1
P-04	41×39	57.99		—	BN2	P-42	34×29	57.64		—	AN1
P-05	28×24	58.23		—	BN2	P-43	23×(17)	57.58		—	AN1
P-06	43×33	58.65		—	BN1	P-44	?	57.64		—	AN1
P-07	20	58.75	△	—	BN1	P-45	35×27	57.46	○	—	AN1
P-08	27×24	58.97		—	BN1	P-46	40×36	57.38	△	製塩土器、㊦(口)、㊦(底)	AN1
P-09	36×28	59.01		—	BN1	P-47	28	57.56		—	AN1
P-10	39×37	58.85	○	—	BN1	P-48	45	57.26	△	㊦蓋(口)-蓋	AN1
P-11	47×39	59.11		—	BN1	P-49	47×37	57.23	○	—	AN1
P-12	41×40	59.05	○	—	BN1	P-50	31×27	57.53		—	AN1
P-13	43×33	59.00		—	BN1	P-51	45×(—)	57.33		—	AN1
P-14	29×27	59.11	△	—	BN1	P-52	35×29	57.48	○	—	BN1
P-15	57×—	59.08		—	BN2	P-53	26×22	57.06		—	AN1
P-16	32×28	59.24	△	—	BN1	P-54	27×—	56.76		—	AN2
P-17	38×34	59.34		—	BN1	P-55	73×55	59.79	△	—	DN1
P-18	欠番					P-56	39×—	60.22		—	DN1
P-19	44×42	59.38	○	—	CN1	P-57	44×—	60.18	○	—	DN1
P-20	欠番					P-58	43×(36)	60.26	△	—	DN1
P-21	36×30	59.54		—	CN1	P-59	40×33	60.29	△	—	DN1
P-22	43×33	59.10	○	—	BN1	P-60	43×37	60.35		—	DN1
P-23	41×30	59.17	△	—	BN1	P-61	43×31	60.47	△	—	DN1
P-24	58×46	59.26	△	㊦(頸)	CN1	P-62	47×(35)	60.39		—	DN1
P-25	52×(34)	59.21	○	㊦(高杯)	CN1	P-63	49×46	60.63		—	DN1
P-26	63×48	59.35		㊦(口)-蓋	CN1	P-64	35×—	60.55		—	DN1
P-27	50×(—)	59.50		—	CN1	P-65	45×38	60.55		—	DN1
P-28	49×47	59.50	○	—	CN1	P-66	14×(11)	58.35		㊦蓋(口)(体)	DS1
P-29	78×54	59.59	○	—	CN1	P-67	14×13	58.81		—	DS1
P-30	72×51	59.88		—	CN1	P-68	20×17	58.16		—	CS1
P-31	39	60.18		—	CN1	P-69	22×16	58.48		—	DS1
P-32	61×42	60.07	○	—	CN1	P-70	18×—	58.45		㊦(口)(体)、㊦(底)	DS1
P-33	51×44	59.80		—	CN1	P-71	25×21	58.81		—	CS1
P-34	47×29	59.05		—	BN1	P-72	26×(25)	57.67		—	CS1
P-35	27×20	58.05		—	BN1	P-73	28×(22)	56.12		—	BS2
P-36	33×30	57.93	△	—	BN1	P-74	30×27	55.71		—	BS2
P-37	27×22	57.81	△	—	BN1	P-75	31×25	57.33		—	AN1
P-38	25×21	57.76		—	BN1						

柱痕跡○は有力、△不確定。

## 第2表 出土遺物観察表

SI-01 (第8~10図)

法量( )は復元値、< >は7分の1以下を推定値

挿入番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色	残存状況	備考	遺物登録番号
1	土師器	①14.0 ③(19.2)	最大胴径を体部上半位にもち、体部は丸い。風化剥落不明瞭。 (外)口縁部ハケ目のち上半ナデ、体部ハケ目。 (内)体部ヘラケズリのち丁寧なナデ。 内外共に全体に成形時の指頭圧痕。	①1~2mmの砂粒 ②やや不良 ③橙褐色	(口) 1/4 (体) 1/3	黒斑有 二次焼成受ける	70 78
2	土師器	①<9.7> ③<10.8> ④<11.3>	口縁部は短く外反、端部は細り、体部は丸い。風化剥落不明瞭。 (内外)ナデ。成形時の指頭圧痕。	①0.5mm以下の砂粒多 ②やや不良 ③橙褐色	(口) 1/2 (口端) 一部 (肩) ほぼ1 (体) 1/5	二次焼成受ける	71 77
3	土師器 (口縁部)	①<27.0>	(外)口頭部縦ハケ目のち口縁部上半ヨコナデ。 (内)口縁部ハケ目、頸部ナデ。	①1~2mmの砂粒多 3mmの砂粒有 ②やや不良 ③灰色	(口) 1/10		87
4	甗	①<26.9>	体部はゆるやかに内湾しながら口縁部で僅かに外傾する。体部中に把手貼付。底部に2孔残存。丸底と思われる。 (外)体部ハケ目、把手接合部ハケ目。底部ナデ。 (内)口縁部横位ナデ。体部ヘラケズリのちナデ。	①1~2mmの砂粒多 3mmの砂粒有 ②良 ③橙褐色	(口) 1/15 (体) 1/4 (底) 1/4	煤付着 黒斑有	35 70 78 92 95 96
5	甗		基部近くの茨口部 (外)ハケ目のち突帯貼付部横位のナデ。成形時の指頭圧痕。 (内)剥落不明瞭。	①2mm前後の砂粒多 ②良 ③灰色			81
6	甗		(外)ハケ目、基部ナデ。 (内)ナデ。	①1~2mmの砂粒有 3.5~4mmの砂礫有 ②やや不良 ③淡橙褐色	(基) 1/12	煤付着	82
7	磨石	L 14.3 W 6.8 T 6.5	長軸方向に3面使用。 使用頻度は低い。	③灰白色	ほぼ完存	1,102g	54
8	自然石	L 38.0 W 18.4 T 10.7	自然石。 長軸1面使用?	③灰白色	ほぼ完存	(11,500)g	94 108
9	須恵器 杯蓋	①(13.5) ④ 5.1	稜は短く鋭さを欠く。口縁端部に内傾する段を有する。 (外)天井部2/3ヘラケズリ。 (内)天井部ナデ。	①0.5mm前後の砂粒多 2~4mmの砂礫有 ②良好 ③灰色	(口) 1/6 (天井部) 1		72 97
10	須恵器 杯蓋	①<13.9>	稜は甘く、沈線状となる。 (内外)ヨコナデ。	①3.5mm大の砂粒有 ②良好 ③灰色	(口) 1/13		51

SK-01 (第12図)

1	製塩土器	①(12.3)	口縁部は内湾し、端部は肥厚する。 (内外)指成形のちナデ。内面に布目痕。	①0.5mm以下の砂粒多 ②良 ③橙褐色	(口) 1/6		62
2	須恵器 杯蓋	①<11.2>	稜は短く鋭さを欠く。口縁端部に内傾する段をもつ。 (内外)ヨコナデ。 (外)天井部2/3ヘラケズリ。	①0.5mm以下の砂粒多 4mm大の砂礫有 ②良 ③(内外)灰色 (外)一部 灰赤色	(口) 1/20		62

P-25 (第21図)

1	高杯 (脚部)	②( 8.9)	緩やかに開き、下半で八の字に開く。 (外)上半工具ナデ、下半ナデ。 (内)ナデ。上半の絞り目を軽くナデ消す。成形時の指頭圧痕。	①0.5mm以下の砂粒多 ②良 ③黄褐色	(裾端部) 一部欠	外面に赤彩痕	65 80
---	------------	---------	---	----------------------------	-----------	--------	----------

遺構外 (第22図)

1	須恵器 杯身	①<9.4> (変)<11.3>	立上りは上方に伸び、端部は丸い。受け部は、外上方に短く納める。 (内外)ヨコナデ。 (内)底部ナデ。	①0.5mm前後の砂粒多 ②良好 ③灰色	(口) 1/10		61
2	須恵器 杯身	①<11.7> ②(13.6) ③( 6.0) ④( 3.25)	立上りは内傾、受け部は外上方に納める。 (内外)ヨコナデ。 (外)底部ヘラ切りのちナデ。 (内)底部ナデ。	①0.5mm以下の砂粒多 2mmの砂粒有 ②良 ③灰色	(口) 1/6 (底) 1/3		58
3	須恵器 杯蓋	(つまみ) 1.9	つまみは扁平。 (外)つまみ貼付後、その周縁部をヨコナデ。 (内)丁寧なナデ。	①0.5mm以下の砂粒有 ②良 ③淡灰色	つまみほぼ1		46
4	須恵器 杯	①<11.7>	(内外)ヨコナデ。 (外)底部ヘラ切りのちナデ。 (内)底部ナデ。	①0.5mm以下の砂粒有 ②良 ③灰白色	(口) 1/24 (底) 1/4		45
5	須恵器 杯	②(10.0)	高台部は八の字に開く。 (内外)ヨコナデ。 (外)底部糸切りのち高台貼付。高台接合部ヨコナデ。 (内)底部ナデ。	①1~3mmの砂粒有 ②良好 ③淡灰色	(底) 1/4		103
6	陶器 碗	①( 9.9) ②( 4.3)	ヨコナデのち口縁部袖拭き取り。体部下半ヘラケズリ。高台内削り出し。高台脇袖拭き取り、高台脇~高台内無袖。	①精緻 ②硬質 ③(断)灰黄色 (袖)灰白色 (露)灰黄色、一部にぶい 橙色	(口) 1/4 (体) 1/4 (底) 1/6	貫入有	4
7	瓦	L (13.26) W (13.45) T 2.3	土師質の平瓦。 凸面正格子。凹面布目痕。 4~5mm程度の正方形で、格子の深いものもある。 側面調整、縦位のヘラケズリを施す。	①2mm前後の砂粒多 5~11mm大の砂礫有 ②良 ③淡橙褐色			17

### 第3節 まとめ

今回の郷原地才工下平遺跡の調査で、竪穴住居1棟、土坑8基、ピット状遺構72基を検出した。出土した遺物には、土師器、須恵器、陶器、瓦、製塩土器、甗、竈、石製品がある。調査した面積に対しそう多くはなく、コンテナ(容量54×34×20cm)約5箱分に相当、このうちSI-01出土遺物が約半数を占める。

今回調査対象となったのは、北西へ延びる細長い稜線から南西へ短く張り出す幅40mほどの小尾根部分約半分、尾根線から南側半分の工事路線対象域に当たる標高52～73mの区域である。よって遺跡の立地を考えた場合、調査区外の北側尾根筋部分にも集落は広がりを見せられると思われる。また、当遺跡から130m東側の尾根続きにあたる標高93mの丘陵頂部では、平成15年度に郷原石堂口遺跡の調査が行われており、長辺19.3mの規模をもつ郷原13号墳、5世紀中葉の築造とみられる14号墳とともに時期は不明ながら土坑や須恵器が出土、関連が注目される<sup>(1)</sup>。

今回検出した遺構は竪穴住居SI-01と土坑8基、ピット72基と、決して多くはない。SI-01は平面方形で支柱穴4本、辺4mを測る標準的な規模の竪穴住居であり、建替えは認められない。また、特殊な性格付けがなされるような遺物も出土していない。この短く張り出す尾根の稜線よりやや南へ下った標高59.5m、小谷部の水田面から13mの比高差をもつ位置に現状では単独で検出されている。北側の調査区外の状況が明らかではないが、SI-01の配置や生活空間を考えた場合、この尾根上に数棟の住居が存在していた可能性は十分であろう。SI-01を取り巻く遺構についても、4m北東のSK-02～04などが関わる土坑として考えられるが、遺物の出土がなく関係を明確にはできなかった。

SI-01の時期については、明確に床面直上の遺物はなく、検出面である第2層中から出土したものがほとんどである。炭化物や垂木と考えられる炭化材の出土からSI-01は焼失住居とみられ、遺物は廃絶後以降に廃棄されたものである。これらの遺物には基本的に異時期の混入はなく、竈、甗、甕などは出土状況からみて同一層中の出土と捉えられる。中に杯蓋片など須恵器数点出土しているものの予想外に出土量が少なく、これら須恵器の年代は陶邑MT15型式併行期、6世紀前半である<sup>(2)</sup>。SI-01以外では時期が特定できる遺構は少なく、SK-01、08、ピット7基で遺物が出土している。SK-01では製塩土器と須恵器杯蓋が出土しているが同一時期とは考え難い。埋土が複雑に分かれておりピットの重複などの状況を踏まえると、SI-01の時期とさほど変わらない時期と推定することができよう。SK-08についても、平行叩きをカキ目で消した須恵器肩部片1点であり時期の特定には至らなかった。P-25の時期に

第3表 竪穴住居一覧表

名称	法 量(mm)			柱穴間(m)	床面標高(m)	平面形	面積(m <sup>2</sup> )	出土遺物等	時 期
	長軸	短軸	深さ						
SI-01	4.05	(3.45)	(36)	1.58×1.76	59.30～59.46	方形	<15.5>	(土)壺・甕・甗・竈(須)蓋杯 磨石・自然石・炭化材	6世紀前半

第4表 土坑一覧表

名称	法 量(cm)			床面標高(m)	主軸方向	平面形	断面形	出土遺物等	時 期
	長径	短径	深さ						
SK-01	197	121	43	57.09	N-32°-E	(楕円形)	不整碗状	竈・須(瓦) 製塩土器	(6世紀前半)
SK-02	123	60	14	60.02	N-12°-E	隅丸長方形	皿状	—	—
SK-03	140	107	25	60.07	N-17°-E	不整隅丸方形	皿状	—	—
SK-04	111	85	26	59.92	N-23°-W	隅丸長方形	逆台形状	—	—
SK-05	114	78	30	60.75	N-32°-W	楕円形	碗状	—	—
SK-06	119	116	67	61.99	—	不整円形	碗状	—	—
SK-07	153	137	51	63.94	N-22°-E	不整楕円形	逆台形状	須片(壺肩部)	—
SK-08	87	77	22	58.36	N-21°-W	不整楕円形	皿状	—	—

( )遺存値 < >推定

については、SI-01の壁溝を切ることから、周辺で見られるピットと同様な時期と考えられるが、P-25で唯一出土した赤彩高杯脚部は、脚柱部が太く短く内湾気味に膨らんでから一旦屈曲して裾部へ開く形態である。5世紀後葉以降に見られる形状であり、SI-01出土須恵器と年代はほぼ合致する。7世紀末～8世紀の遺物についてもそう多くは認められない。瓦についても断片的な資料であるが、凸面格子目たたき、凹面布目の土師質の平瓦と焼成良好の薄い仕上りの須恵質瓦の2種が出土している。

ところでSI-01出土の土師器は、置竈(移動式竈)、甗、甕、壺から構成される。この竈、甗、甕のセットが日常炊事用あるいは行事用の非日常的な性格を有するかどうかは別にして、SI-01のような普遍的な一般住居で構成される集落、千代川中流域の低丘陵に立地する小集落にまでこの時期には普及していたことになる。この移動式竈の初現は山陰地方では陶邑TK208、TK23型式併行期頃で、6世紀後半から7世紀前半にかけて出土例が増加する傾向があるとされ、5世紀後半から6世紀前半にかけては掛口(口縁部)が甕のく字口縁形態である資料が目立つ<sup>(3)</sup>。当遺跡の資料は掛口の形状は不明であるが、出土状況と遺物を考えた場合、土師器は竈と甗あるいは壺の口縁部から成り、竈の掛口に相当するような端部が見られないことや壺、甕の口縁部が数個体確認されることから、竈の掛口は甕口縁部形態であった可能性をもつ。

今回の調査地で出土した遺物から、時期的には大きく6世紀前半、6世紀末から7世紀初頭、7世紀末から8世紀前葉の3時期に分かれる。出土遺物の面からも、果樹栽培等によって上部が削平されている可能性はあるものの、谷部での遺物の出土量などを考慮に入れると、何世代にも渡ってこの尾根上に集落が営まれたような状況は見出せなかった。また、SI-01の周辺では建物の特定は出来なかったもののSI-01より新しいと考えられるピットの一群を検出し、土層断面から柱痕跡と認められるものも少なからず存在した。そうしたことから、SI-01廃絶後は掘立柱建物がこの集落を構成する建物となっていたと考えられ、断続的に細々と住居を構えていた区域と捉えることができよう。

また、同一丘陵に立地する郷原古墳群は、現在の分布状況では三谷川が貫流する小平野部を見下ろす東側丘陵に立地しており、郷原集落への眺望がきかない当遺跡の立地する小谷部および現JR因美線沿いの谷部では現在のところ分布が確認されていない。このことは、この地域で古墳時代において居住域と墓域との区別がなされていたとみることができよう。生産域の狭小な小平野部を有効利用するため、やや小高い尾根上に居住域を求めていったと考えることもできよう。従来、現集落が営まれている丘陵裾部を中心に古代の集落も重なるという推測以外に、今回丘陵上にも住居が検出されたことで、今後さらに尾根単位での様相が判明してくれば、時期によって墓域や居住域など立地に差が見られたり、丘陵から小平野部への進出など、興味深い事象が明らかとなってくるであろう。また、当時の集落を考えていく上で、一極集中的な住居の分布自体があったのかどうかについても考えていく余地を残したと言えよう。

このように、千代川、八東川が合流するこの地域は、河川の氾濫を避けるため内陸部へ居住域、生産域を求めていった結果、山手、郷原、三谷の小平野および周辺低丘陵に各種遺跡が展開していった地域である。この地域において2.5km北東に位置する八上郡衙、万代寺遺跡の存在は大きい。万代寺遺跡の立地する国中平野から用瀬および山間地域へ抜けるには、この郷原と山手集落間を抜けて南下し釜口へ抜ける現JR因美線ルート、三谷谷を抜けて国英駅東側へ抜けるルートがあり、大江谷へも抜ける三谷谷は交通の要所であったと考えられる。万代寺遺跡が律令期の大遺跡にせよ前後の時期や周囲に分布する集落の後ろ盾がないことには地域全体の繁栄は望めない。また、律令期ばかりでなく、その前後や古墳時代、弥生時代などの遺跡の細かな検討、鳥取平野地域の様相との対比、山間部地域との差異など、千代川水系の中流域としてこの地域のもつ独自性、特殊性を追求できればさらには東部地域全体の様相の解明へと繋がっていくものと思われる。

註(1) 鳥取市文化財団『郷原石堂口遺跡・郷原古墳群』2006年

(2) 須恵器の年代については以下の文献を参考とした。

田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年

大阪府立近つ飛鳥博物館『年代のものさし—陶邑の須恵器』平成17年度冬季企画展図録 2006年

郡家町教育委員会『下坂窯跡群』1988年

(3) 加藤裕一『移動式竈について』『名和飛田遺跡』(鳥取県教育文化財団 2005年)



# 版 图





郷原地才工下平遺跡 調査前近景(南西から)



郷原地才工下平遺跡 調査前(北東から)

図版 2



郷原地才工下平遺跡 調査地全景(南西から)



郷原地才工下平遺跡 調査地全景(北東から)





調査区G~H杭間  
土層断面  
(北西から)



調査区GN2区  
C-C'間土層断面  
(南西から)



調査区D~DS2杭間  
土層断面  
(南西から)

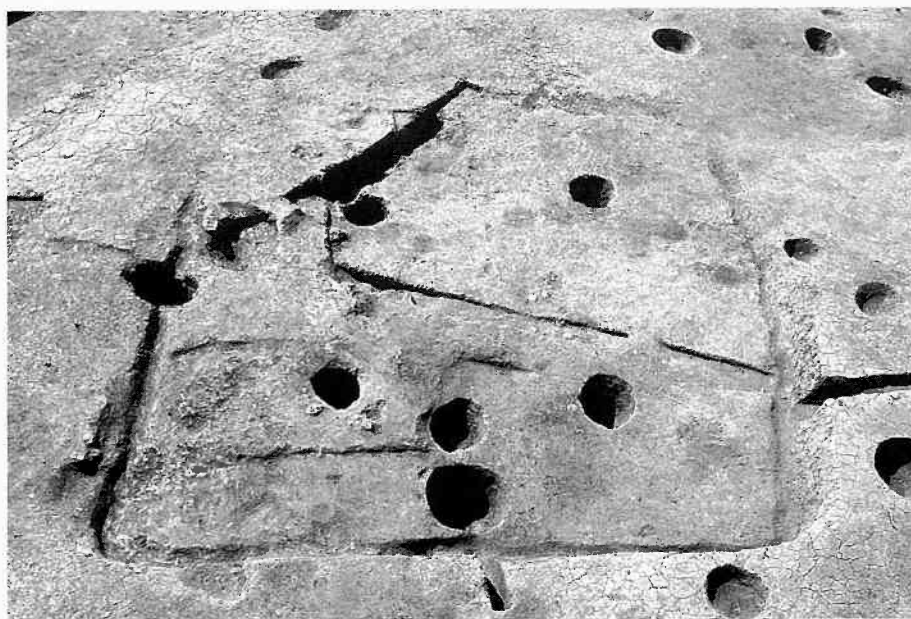
図版 4



SI-01  
土層断面  
(北西から)

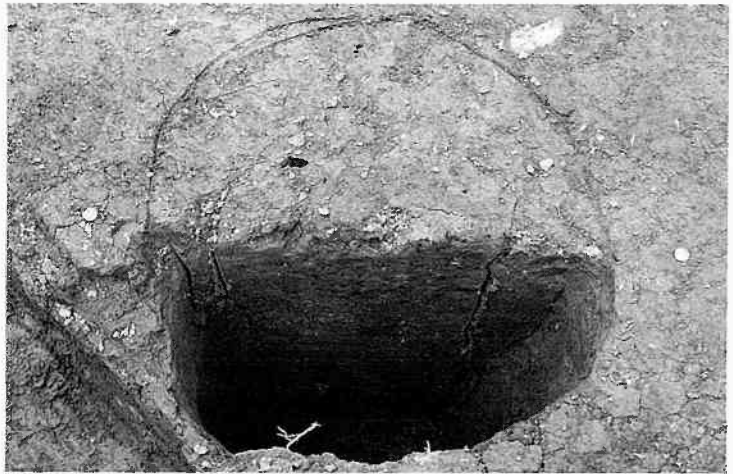


SI-01  
遺物出土状況  
(南西から)

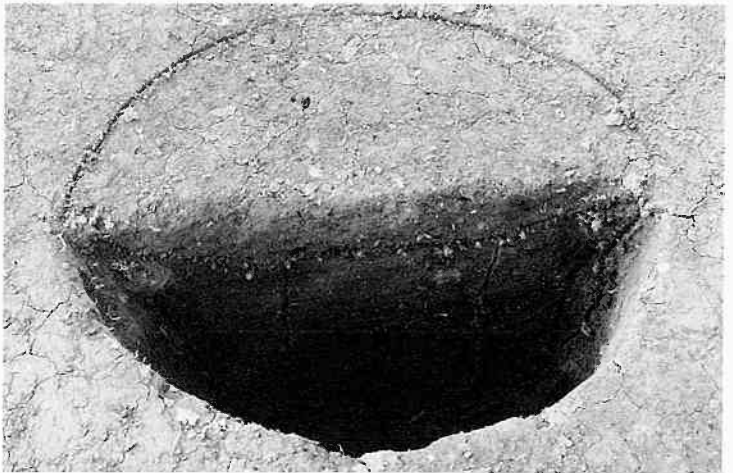


SI-01  
完掘状況  
(北東から)

SI-01  
SIP-2断面  
(南東から)



SI-01  
SIP-4断面  
(南東から)



SI-01  
壺(図1)出土状況  
(南東から)



SI-01  
壺(図2)出土状況  
(北東から)

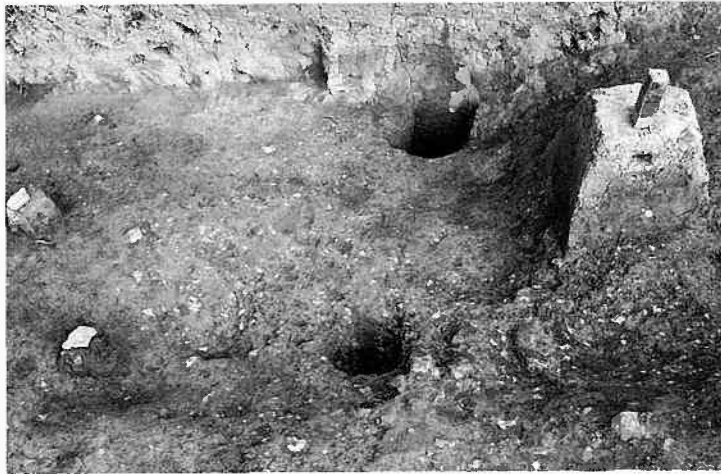




図版 6



SK-01断面  
(南西から)



SK-01完掘状況  
(南東から)



SK-02検出状況  
(北西から)

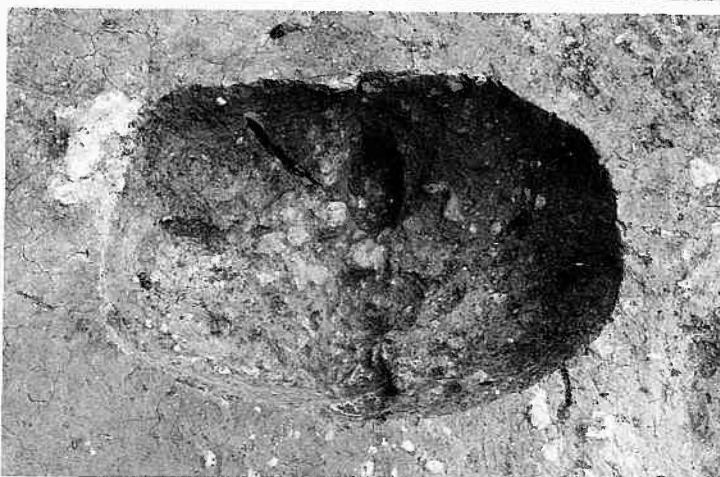


SK-03検出状況  
(北西から)

SK-04検出状況  
(南西から)



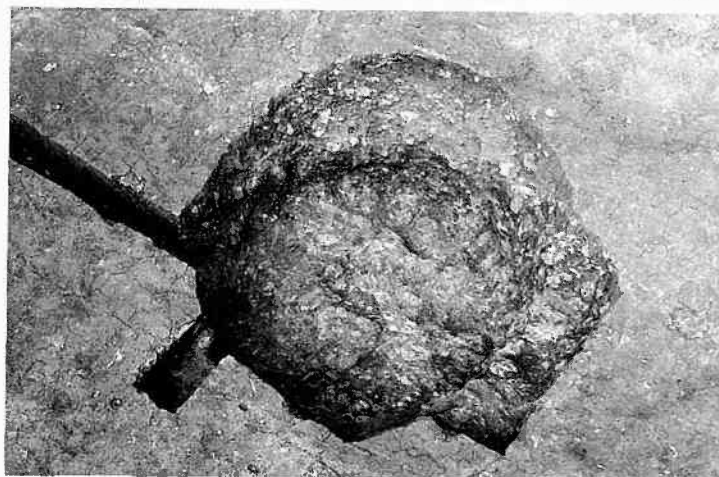
SK-05検出状況  
(南西から)



SK-06検出状況  
(北西から)



SK-07検出状況  
(南西から)





図版 8



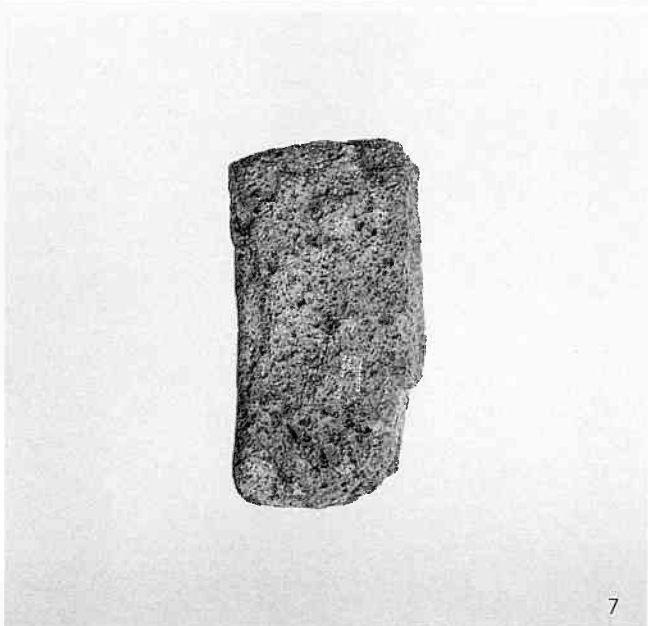
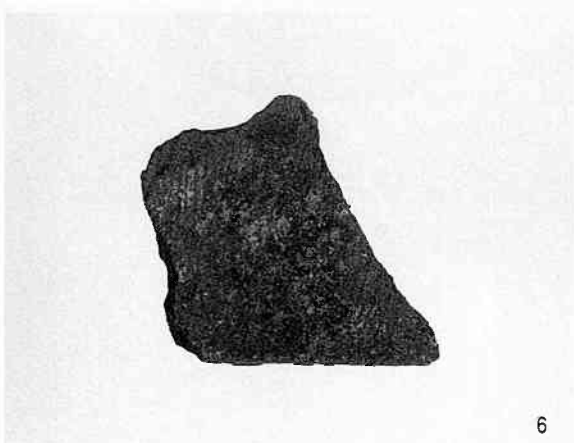
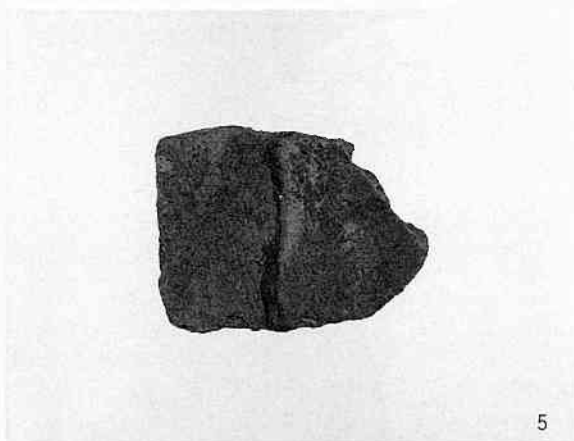
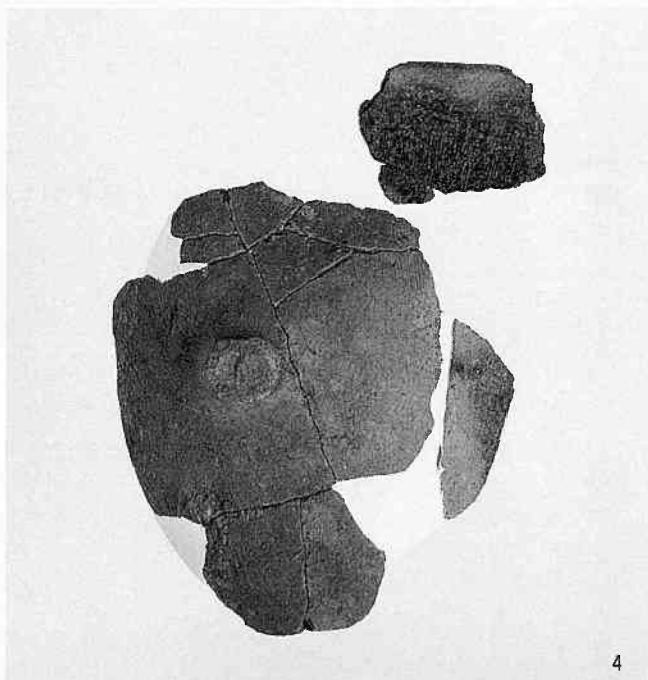
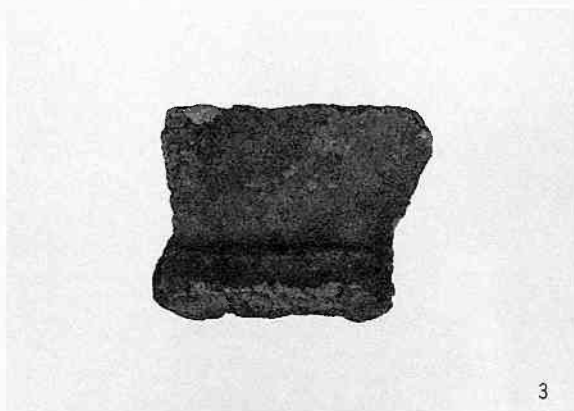
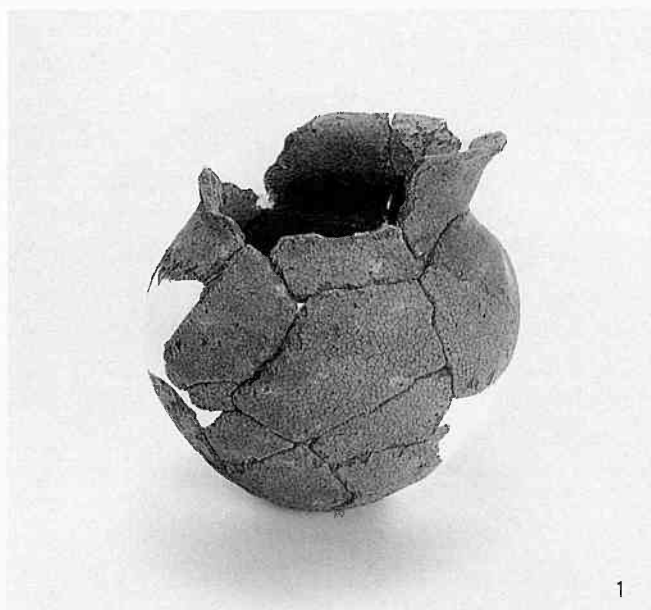
P-25検出状況  
(北東から)



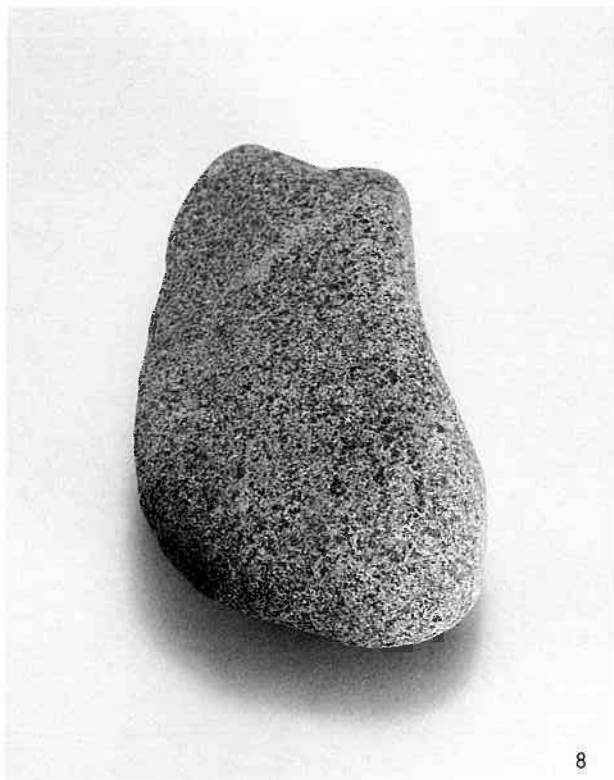
CN1~DN1区  
ピット検出状況  
(東から)



DS1~DS2杭間  
トレンチ土層断面  
(南から)



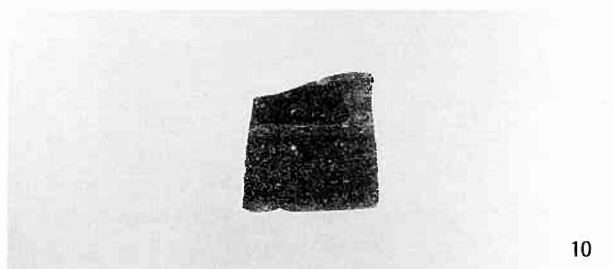
图版10



8

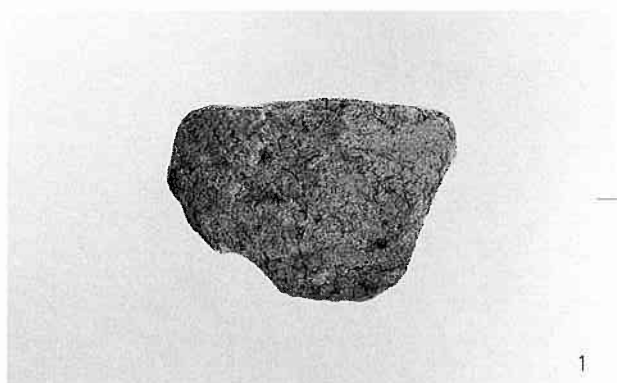


9

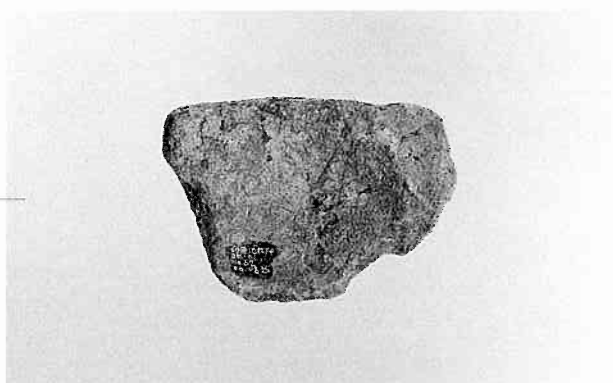


10

SI-01出土遺物



1



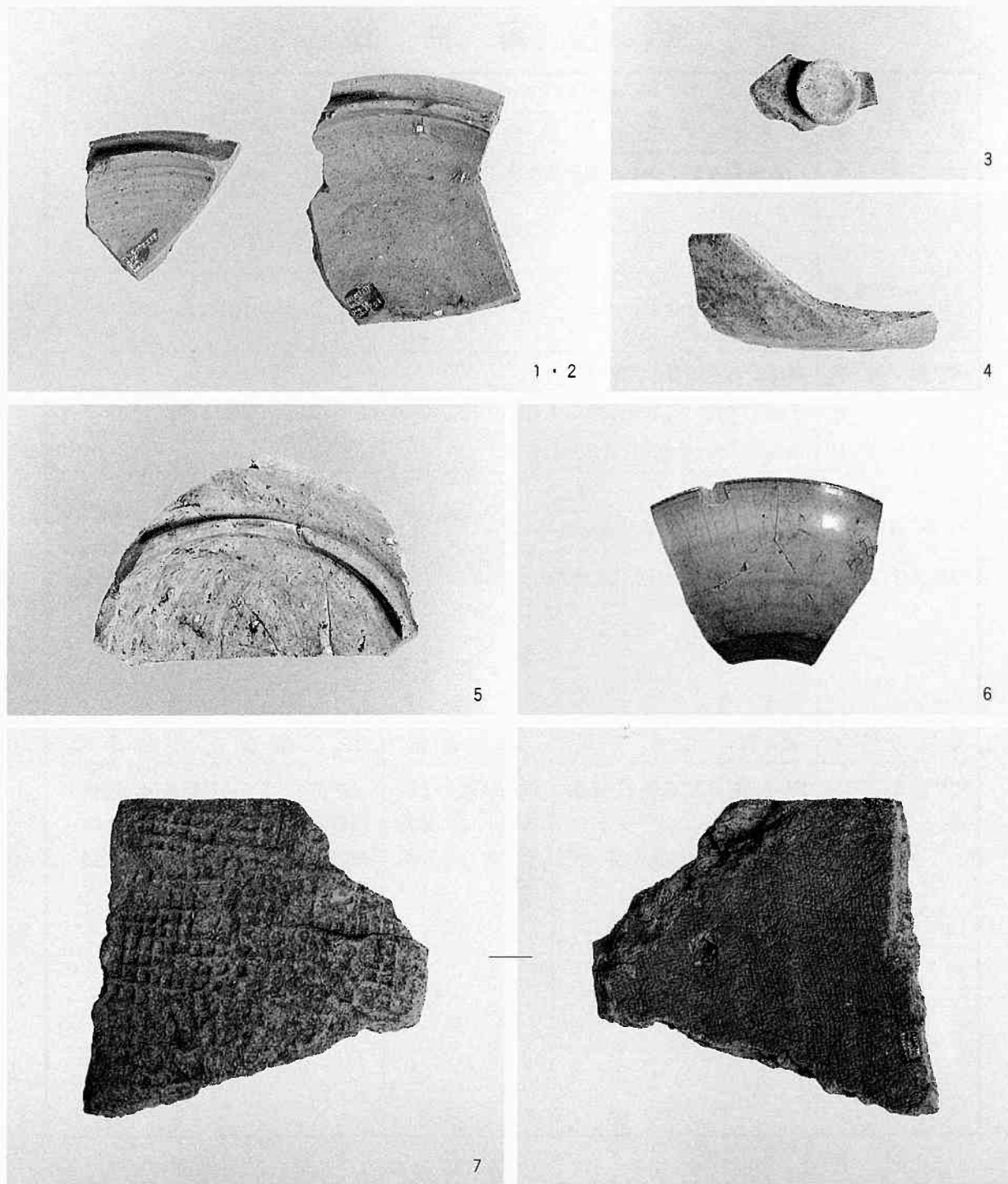
2

SK-01出土遺物



1

P-25出土遺物



遺構外出土遺物

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ごうばらじざいくしもひらいせき							
書名	郷原地才工下平遺跡							
副書名	一般県道河原インター線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	谷口 恭子							
編集機関	財団法人 鳥取市文化財団							
所在地	〒680-0015 鳥取県鳥取市上町88 TEL(0857)23-2140							
発行年月日	西暦2007年(平成19年)3月23日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市 町 村	遺跡番号					
ごうばらじざいくしもひらいせき 郷原地才工下平遺跡	とっとりし 鳥取市 かわはらちょう 河原町 ごうばら 郷原	31201	1-0236	35° 23' 35"	134° 12' 53"	H18 05 25 ~ H18 11 15	1,603	道路建設
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項			
郷原地才工下平遺跡	集 落	古墳時代後期 ~ 奈 良 時 代	竪穴住居 1棟 土坑 8基 ピット 72基	土師器 須恵器 陶器 瓦、製塩土器、 甑、竈 石製品 炭化材	標高59m尾根上に一辺4mの 方形竪穴住居			



---

---

## 郷原地才工下平遺跡

—一般県道河原インター線道路改良工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成19年3月23日 印刷・発行

編集・発行 財団法人 鳥取市文化財団

印刷所 勝美印刷株式会社

---

---